想いの行方

山口多聞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
想いの行方

【Ｎコード】
Ｎ０８２５Ｃ

【作者名】
山口多聞

【あらすじ】
三千院家で働く借金執事ハヤテ。そんな彼に連続して幸運な出来事が起こる。しかし、それはある悲劇の序章であった。そして、その後にまちうけるは・・・

プロローグ

日本有数の大富豪三千院家。そこに、１人の執事をしている青年がいた。

その青年は１６歳で容姿は女っぽいのだが、体はまるで〇ンダムの生まれ変わりといわんばかりに頑丈で、例え車に轢かれようが、数十メートルの高さから落ちようが、常人が食べたら死ぬような物を食べても死なない、もはや不死身ともいえる存在であった。そして化け物並みの体力、と親から押し付けられた１億５千万の借金を持っていた。

生まれてこのかたお金とはとことん縁がなく、もし今の主人であり、屋敷の主でもある三千院ナギが彼を助けてくれねば、あやうく親の借金のかたとして、ヤクザによって人身売買されるところであった。

その後色々あったが月日は過ぎ2年後、年は２００６年になった。

この年、そんな彼に大きな転機が訪れた。それはある5月の平日、彼は何とはなしにある物を買った。それは今世間が熱中している某宝くじで、一等が6億の高額賞金くじであった。もちろん、彼自身当たるなんて考えは毛頭なかった。ただ、ちょっとした遊び心で一枚買っただけであった。だが驚くべきことに、なんと大見事に一等が当たった。

もちろん、彼自身最初は信じられぬ思いであった。なにせ彼の人生は不幸の連続だったからだ。しかし当選は真実であり、彼は残額借金以上のお金を手にすることとなった。だが、驚くべきことはま

だまだ続いた。

さらに、7月にはナギに付いていった旅行先の中東で、偶然にも新たな油田地帯を発見するという幸運にも恵まれ（どのように発見したかは秘密です。）そこからの莫大な利益が転がり込むようになった。

これら二つの出来事よって彼は借金まみれから、一転して財産数億の金持ちになったわけである。しかもその財産も常に増える状況と成った。まさに超幸運である。

だが、生まれてこのかた不幸な彼は、あまりにつきすぎている今の状況に危機感を抱いていた。何かとんでもないことの予兆ではないかと。そして、それは現実の物となる。しかも、彼の生命の危機という形で。

これはその彼が生命の危機に遭遇し、その後々の状況を記した物語である。

２００６年６月

「ハヤテ君。前からずっとあなたのことが好きだったの。私と付き合ってください！！」

ここは私立白皇学院の生徒会室である。今そこで１人の制服姿でピンク色の長い髪を持った美しい少女が、目の前に立つ、執事服を着ている好きな男子に告白を試みていた。ちなみに、この生徒会室

は何故か時計塔のてっぺんに設けられている。そのため一々出入りするのにエレベーターを使用しなければならない。

その生徒会室に、今まさに綾崎ハヤテはいた。そう、告白されたのは彼である。そしてその目の前でハヤテに告白した美少女は、同級生であり、ハヤテが日ごろからお世話になっている最強生徒会長、桂ヒナギクである。

彼女は美人かつ成績優秀かつスポーツが得意で学院内の人気者である。ちなみに、2年前までは胸が小さいことをコンプレックスしていたみたいだが、今ではその容姿も大分大人びている。

彼女は2年前、初めて会ったときからハヤテのことを意識していたが、ついに意を決してハヤテをこの部屋に呼び出し、告白したのである。その背景には、かつてハヤテが自分は甲斐性がないから女性と付き合えないという言葉をしっかり覚えていたからだ。今ならその問題は解決している。だから告白しても大丈夫という考えが彼女の頭の中にはあった。

しかし、ハヤテはうつむきながらこう答えた。

「ありがとうございますヒナギクさん。・・・・・・けど、今すぐ返事は出来ません。しばらく待ってください。」

その言葉に、ヒナギクの表情は悲しみを帯びる。

「どうして？なんで？・・・・・もしかしてハヤテ君。好きな人でもいるの？」

ハヤテには恋人はいないはず。だからこそ今回彼女も告白に踏み

切ったのだ。だが、完璧に断わってないとはいえ、保留ということは彼自身に迷いがあるということ。つまりそれは誰かを彼が好きではないかということと彼女は考えた。

「いえ。・・・・・特にそういう人はいないはずです。でも、とにかく今は返事を出せません。少し時間を下さい。」

ハヤテはそう言って、お茶を濁した。そして、ヒナギクもそれ以上は何を言っても無理と悟った。

「わかったわハヤテ君。・・・・・いい返事を期待しているわ。」

ハヤテはエレベーターで一階まで下り、時計塔を後にした。

「ごめんなさいヒナギクさん。」

一度時計塔の方を振り返ると、ハヤテはボソッと呟いた。

プロローグ（後書き）

御意見御感想お待ちしています。

すれ違い

ハヤテは白皇学院から帰ると、三千院家の自分の部屋に入る。

ハヤテにあてがわれているその部屋はは屋根裏に近い小さな部屋で、中にはベッドと机に椅子、そして衣装タンスが一つずつという殺風景な部屋だ。

大金を手にしても、ハヤテの長年の習慣とかしているこうした生活は変わらない。

部屋に入ると、鞄を机の上に置き、彼は椅子に座る。

「はあああ・・・・」

座るなり、盛大なため息をついた。

彼はここの所ため息をつきっ放しだった。

「どうすればいいんだろ？」

ふとそんなことを呟く。

彼は今深刻な悩みを抱えていた。それは彼が一番不得意とする分

野であった。恋愛という分野である。彼が恋愛に関して不得意なのは、三千院家のハウスメイドマリアが「天然ジゴロ」と言うほどひどい。

一方で、そんな彼を好きになる女性は意外と多い。2年前から継続的にアタックしてくる元同級生の西沢歩はもとより、先ほど告白を受けた桂ヒナギク、そして意外なことに同級生で生徒会役員の瀬川泉や、それに三千院家の親戚である愛沢家の長女咲夜までもが彼に告白してきたのだ。ちなみに、他にヒナギクの姉の雪路も告白してきたらしいが、これはハヤテが後に言った所では、「目が完全に¥マークになっていたから数には入りませんでした。」と言っていることから、どうやら金目的であったようだ。

雪路の金遣いの荒さと酒癖の悪さは有名である。

またナギの親友である鷺ノ宮伊澄も彼のことを好きだったようだ。だが彼女が告白することはなかった。これはもちろん、親友であるナギを思ってのことだった。

話が脱線したが、というわけでハヤテは実に4人の女性から告白を受けたことになる。

まさに青天の霹靂。

ハヤテ自身、まさかこんなことになるとは思ってもいなかった。実のところハヤテは確かに貧相で女顔っぽい所はあるが、人への思いやりはすごく深い。そいう性格だから女性を引き付けたわけではあるが、まさかそれで苦しむこととなろうとは思いもよらなかった。

今ハヤテは悩みに悩んでいた。全員に返事はしなければならない。

かつての様に自分は女性を養う甲斐性がないという言い訳はもう通じない。今や彼は数億の資産を持つ金持ちなのだから。

「どうしたらいいんだろう？」

ハヤテにしてみれば、４人全員とは浅からぬ縁で結ばれている。そしてその全員に魅力があり、ハヤテも嫌いではなかった。しかし、その内の一人を選ぶなど、心情的に無理な話であった。実際それは決めにくいという事もあるが、１人を選べば残りの女性を悲しませることと成る。それが彼自身、心苦しいのであった。

そして、実はもう一つ理由もあった。

そういうわけで、今い彼の心は張り裂けそうであった。いつ鬱病になってもおかしくない状況である。

「なんとかしなくちゃな。」

そう呟いたとき。

トントン！

ドアをノックする音が。

「どうぞ。」

この屋敷でここを訪れるのはナギかマリアの２人だけである。案の定、ノックをしたのはこの屋敷の主人であり、ハヤテが仕えるナギであった。

彼女は今１５歳。初めて会ったときに比べ背も伸び、体形も他の女性と同様大分大人びてきている。

もっとも、そう見えるのは彼自身2年間一緒に付き合ってきたのも大きな要因である。2年間で2人は沢山の事を体験してきた。その度に、ハヤテは彼女が成長しているのを感じていた。

「ハヤテ、ちょっとお前に聞きたいことがある。」

「何でしょうか？」

「ヒナギクや泉、咲夜、それにハムスターから告白を受けたというのは本当か？」

部屋に入るなり、ナギハ今正にハヤテが悩んでいた問題を言及してきた。ちなみにハムスターというのはナギが歩のオーラを見てつけたあだ名である。

「え？・・・・・・それは・・・」

ハヤテはどう答えていいものか迷った。

「はっきり答えろハヤテ！！」

いいかげんな事を言うハヤテにナギが怒る。

ここで黙っていてもしょうがないと思い、ハヤテは本当のことを言うことにした。

「はい。そうですお嬢様。」

その答えに、ナギ表情一つ変えなかった。しかし、すぐにハヤテに質問してきた。

「それで、ハヤテは答えを出したのか？」

「まだです。この４人の中から選ぶなんて・・・・」

そうハヤテが言った途端。ナギが突然涙を流し始めた。

「え！？お、お嬢様？」

ハヤテには何がなんだか全くわからない。

「・・・・・・の・・・・か・・・・」

ナギが何事か呟いた。

「え！？」

そしてナギはハヤテを見据えて叫んだ

「ハヤテのばか！！！」

そして部屋から出て行ってしまった。

「お、お嬢様！！・・・・・・一体どういうことなんだ？」

ハヤテは呆然と立ち尽くすだけであった。

すれ違い（後書き）

御意見御感想お待ちしています。

真実

「お嬢様・・・・」

部屋を出て行ったナギを、ハヤテは呆然として見送るしかなかった。

これまでにも同じような経験を何回もしてきた、しかし、いつもその原因を考えてもハヤテにしてみれば全く思い当たる節はない。

しかし、今日のナギの言葉はいつも以上に真剣さと怒気が感じられた。

「一体どうして？」

いつもとは違うナギの態度に、ハヤテは自問自答する。だが、その答えはいつもと同じく出てこない。

そんな中、再びノックをする音が聞こえてきた。

「どうぞ。」

「ハヤテ君。」

入ってきたのは、この屋敷で働くハウスメイドのマリアだ。彼女だけは屋敷に入った2年前からあまり変わらない。元々大人っぽかった容姿であったから、今は歳（ちなみに１９歳）相応になったといえよう。

「マリアさん。」

「ナギが走って出て行きましたけど、今度は何があったんですか？」

ナギが怒り、ハヤテに怒鳴り散らすのは日常茶飯事。三千院家の恒例行事と言ってよい。

「あ、マリアさん。僕にも良く分からないんですよ。ただ僕が告白を受けて、返事に迷っているって言った途端・・・」

「告白？」

マリアはその言葉に注目した

「はい、実は・・・・」

ハヤテはマリアに４人の女性から告白されたことを正直に全部話した。

そして、話しを聞き終えると、マリアはなにやら納得した表情をして話し始めた。

「ハヤテ君・・・・・・いつか話さなきゃいけないと思っていましたが・・・・多分今がその時でしょう。」

マリアの表情が真剣になる。いや深刻と言ってよい。

その尋常ならざる彼女の表情に、ハヤテも事の重大さを悟った。

「話さなきゃいけないことって何ですか？」

「それは・・・・・ハヤテ君。あなたがナギと初めて会ったとき、あの娘を誘拐しようとしたときなんて言ったか覚えていますか？」

ハヤテがナギと初めてあったのは2年前のクリスマスである。ハヤテはその日、両親が作った1億5千万という膨大な借金を背負わされ、公園で1人途方に暮れていた。その時考えたのが誘拐による身代金での返済であった。そしてそのターゲットと成ったのがナギであった。

幸い、誘拐は未遂に終わり、逆にハヤテが誘拐されそうになったナギを、身を挺して守ることとなり、それで執事として採用され、借金を肩代わりしてもらえることとなったのだ。ちなみにその事実を知るのはマリア1人だけである。

ハヤテにとっては忘れたくても忘れられない出来事である。そして、時々それを負い目に感じることもあった。

「ええと・・・・・・確か・・・・・僕は君が欲しいんだ。だったと思います。」

「そう。ハヤテ君はそれを誘拐するつもりで言ったんでしょうけど、実はナギはそうは受け取らなかったんです。」

「え！？」

ハヤテはただ驚くしかなかった。ナギも知っていることだとずっと思っていたからだ。

「ナギは・・・・・あの娘はその言葉を・・・・・付き合って欲しい、つまり自分への告白として受け取ったんです。」

その言葉に、ハヤテは頭をぶん殴られたような気がした。それとともに、これまでナギが自分と異性が付き合うことに、異常なほど敏感であった謎が氷解した。

自分が恋人と思っている人が他の女性と付き合うことなど、確かに許しがたいことに違いない。

「そうか・・・・・だからお嬢様は・・・・・」

謎は解けた。とともに、取り返しのつかないことをしてしまったとも思った。おそらくさっきのことはナギの心に大きな打撃を与えたに違いない。

そしてまた、2年間側にいたのに、その事に気づけなかった自分自身への無力さも感じられた。

真実（後書き）

御意見御感想お待ちしています。

危機

ハヤテの心の中を、無力感と悔しさが支配していった。

しばらく、二人の間を沈黙が支配した。

しかし、数分後マリアが沈黙を破って再び話し始めた。

「ハヤテ君。ごめんなさい。けど、絶対にいつか言わなければいけないことだったから・・・

けど、だからと言って、ハヤテ君がもしその４人の中に、決めている人がいるなら、それはハヤテ君の自由です。ナギは私が説得しますから、ハヤテ君は自分の好きなようにしてください。」

マリアはあくまでハヤテに自分の好きなようにすることを進めた。

しかし。

「マリアさん。実は・・・・・・４人の告白を保留にしたのはもう一つ理由があるからなんです。」

「もう一つの理由？」

一体なんだと思うマリア。

「ええ・・・・・実は告白を受ける度にある人の顔が頭に浮かんだんです。」

「ある人・・・・・？」

マリアはその人を考えてみる。そこで、ある思考が思い浮かんだ。

「まさか！？」

「・・・・・・・そうです。ナギお嬢様です。」

マリアの予感は当たった。

「最初気付いた時には自分でも信じられませんでした。2年前だったらお嬢様のことは子供扱いして眼中にはなかったでしょう。けど、2年間付き合って、確かに色々困った所はあるけど、それ以上の魅力に気づいたんです。そして執事として以上に、1人の男として彼女を守りたいという気持ちが生まれたんです。だから・・・・・・お嬢様の気持ちも一度確かめたかったんです。」

ハヤテがナギのことを好きになった。2年前だったらマリアはあまり好い気がしなかっただろう。けど、今なら大歓迎である。

「そうだったんですか。」

「けど・・・・・・・お嬢様の気持ちには気づけなかった。2年間も一緒にいたのに・・・・・・大切な人の気持ちにも気づけないなんて、やっぱり僕に女性と付き合う資格なんてないんですね。それに、執事が主を好きになるなんて・・・・」

そこまで言った時、マリアが声を荒げて言った。

「それは違いますよハヤテ君！！」

「マリアさん！？」

普段めったにマリアが出さない表情に驚くハヤテ。

「人が誰を好きになるのかなんてその人の自由です。執事だからあきらめるなんて卑怯です。ただ逃げているだけです。ナギのことを本当に思うのなら、ナギにその気持ちを伝えるべきです！！」

「けど・・・・僕は・・・・・。」

やはり罪の意識が先に立つ。

「ハヤテ君・・・・・・悔やむより先にナギのことを考えてあげたらどうですか？大丈夫、これからその分の埋め合わせをしてあげればいいんです。」

マリアが諭すように言った。

「とにかく、まずナギに本当の気持ちを言ってあげるべきです。まずはそれからです。」

「・・・・・・・・・わかりました。」

その時、ハヤテの部屋に1人の紳士が駆け込んできた。

「おお、二人ともここにいたのか！？」

執事長のクラウスであった。

「どうしたんですかクラウスさん？そんなに慌てて？」

「ハヤテ、実はまたお嬢様の命を狙って暗殺者が日本に潜入したと警察から連絡があったのだ。」

ナギはその身分ゆえ、暗殺者に命を狙われることが絶えない。例によって今回もまたナギが命を狙われているようだ。

「けど、屋敷の中にいれば大丈夫でしょ？」

三千院家は２４時間敷地内をＳＰと警備ロボットが守っている。はっきりいって屋敷内部へ不審者が入ることなど不可能だ。

と、そこでハヤテはクラウスが息を切らせて走ってきた理由を考えてみた。

つまり、それは。

「まさか！？」

「そのまさかだ。お嬢様は１人で外に出て行ってしまったんだ。情報によれば暗殺者は練馬区内に潜伏しているらしい。」

クラウスの言葉は、ナギが限りなく命の危険にさらされていることを表していた。

危機（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

死闘

「ハヤテのバカ・・・・・」

ナギはひとり公園で泣いていた。

ナギは2年間の間、ずっとハヤテと自分は恋人であると信じて生きてきた。もちろん、途中で疑いたくなることは何度もあった。しかし、3年前のあの言葉を信じて、ナギはその疑いを打ち消してきた。それなのに、今日のハヤテの返答は。

「やっぱり私のことなんて・・・・」

ナギは悪いことを想像すると、どんどん悪いほうへ想像をめぐらせる傾向にある。今回も多分にもれず、また悪いほうへと思考が走っていた。

そんな彼女を、ある人物が物陰からじっと見ていた。

「鴨がねぎ背負ってやってきてくれたぜ。」

そういうとその男は、懐から大型拳銃を取り出した。

そう、この男こそナギを狙ってやってきた暗殺者であった。

ちなみに、ナギの遺産はハヤテを殺さなくては奪えないのでは，と思う人もいるかもしれないが、冷静に考えればやっぱり唯一の相続人であるナギをやった方が手っ取り早いのは子供でも分かる理屈である。

だいたいハヤテを倒そうとして逆に返り討ちになった殺し屋や暗殺者集団はすでに１００人以上と成っている。それならナギをやった方が遥かに合理的である。

というわけで、最近になってナギはその命を狙われていた。

もっとも、普通ならナギ自身が屋敷の中にいるか、外に出てもＳＰが護衛についているため暗殺できる余裕など兆が１の確率もない。そのどちらでもなくても、最終防衛線ともいえるハヤテと一緒にいるためやはり暗殺できる隙はない。

普段はそういう状況であるのだから、今こそまさに千載一遇のチャンスであった。

暗殺者は拳銃のスライドを引いて弾を装填する。それを確認すると、照準をナギの心臓に付ける。頭でないのは、万が一昏睡状態になると厄介であるからだ。心臓を貫いて即死させるのが一番確実な方法である。

彼が潜伏している草むらからナギまでの距離は凡そ２０ｍ。十分いけるはずだ。

「怨むなよ・・・・・こっちも生活かかっているもんでね。」

男は引き金に手を掛ける。

ナギ絶体絶命！！

ハヤテは走っていた。ナギが行くとすればあそこしかない。

負け犬公園。ハヤテとナギが始めて会った場所。ナギが1人で行き、悩むとすればそこしかない。

「お嬢様、どうか御無事で。」

心の中で祈るのはただそれだけであった。

公園に着くと、すぐに辺りを見回してみる。案の定彼女はあの自販機の前にあるベンチに座っていた。

「よかった。」

と、ホッとしていられたのもほんの数秒であった。ハヤテの目に、一瞬だったが何か鈍い反射光が入ってきた。

「何だ!?」

じっと目を凝らす。彼の視力は5，0だ。（これはオリジナル設定です。）

すると、少し離れた草むらの中に不審な男の姿が見えた。彼は直感した。こいつは例の暗殺者に違いないと。

彼は猛然とダッシュし、あらん限りの声で叫んだ。

「お嬢様！！伏せて！！」

一方、ナギも暗殺者も彼に気づいた。

「ハヤテ！？」

ナギは直ぐに立ち上がった。

一方の暗殺者は予期せぬ事態に舌打ちしながらも、引き金を引いた。

重々しい銃声が公園に響いた。

「キャアアア！！」

ナギが悲鳴を上げた。

「お嬢様！？」

幸いといおうか、相手の手元が狂ったようで、銃弾が命中したのはナギの左側のツインテールであった。後数ｍｍで頭を直撃したであろう銃弾は髪の毛を吹き飛ばしただけに終わった。

「くそ、今度こそ。とどめだ！！」

立ち上がり、再び狙いをつける暗殺者。

「させるか！！」

その男めがけ、ハヤテは全速でタックルを掛けた。そしてそのまま二人とも揉みくちゃになる。

地面で取っ組み合う二人。

「ハヤテ！！」

ナギがそう言った時。

バンバン！！

２発の銃声が響いた。犯人が駄目元で撃ったようだ。

それでもハヤテは無事だったようで、取っ組み合いは続いた。そしてなんとかハヤテが手刀を相手の急所に打ち込み、沈黙させることに成功した。

「はあ、はあ。」

相手が気絶したのを確認すると、息を荒げながらハヤテは立ち上がった。

「ハヤテ、大丈夫か！？」

ナギがハヤテの側に近寄った。

「僕のことより、お嬢様は？」

「私は無事だ。髪が吹き飛ばされただけだ。ハヤテが叫んでくれたおかげだ。ありがとう、ハヤテ。」

ナギはハヤテの体に抱きついた。

しかし、そこで手が何か生暖かい物に触れた。

不思議に思ってナギが手を見てみると、それは鮮血であった。

「え！！？？」

さらに、ピチョ、ピチョと言う音がしてきた。地面を見ると、鮮血の水溜りが出来始めていた。そしてその鮮血は、ハヤテの執事服から広がっていた。

「は・・・」

ハヤテと言うよりも早く、ハヤテは地面に倒れた。

そして、倒れた体から夥しい血が流れ始めた。

「キャアアア！！！ハヤテ！！！しっかりしろ！！！誰か、誰か助けて！！！ハヤテが死んじゃう！！」

この直ぐ後に声を聞きつけたマリアたちが到着し、ハヤテは直ちに医療ヘリで三千院家傘下の病院へと運ばれた。

死闘（後書き）

御意見・御感想おまちしています。

語られる想い

撃たれたハヤテは直ぐに医療ヘリで三千院総合病院へ運ばれ、そして手術が行われた。怪我は思ったよりひどいらしく、始まって3時間たった今でも続いている。

手術室の手術中の赤いライトは消す気配を見せない。

そんな中、ナギは1人手術室前の待合席に座って動こうとしなかった。

見かねたマリアが隣に座って声をかける。

「ナギ大丈夫？あまり無理しちゃだめよ。」

「気にするなマリア。例え倒れても死ぬことはない。」

「ナギ・・・・」

ナギは全く聞く耳を持とうとしない。

ただずっと両手を握って何かを祈っているようだ。

こんな真剣な、いや深刻な表情をしたナギをマリアは見たことがなかった。これ自体、今回の出来事の深刻さを物語っている。

その後しばらく二人の会話は途切れたが、ふいにナギがこんなことを言った。

「なあマリア・・・・・・・なんでハヤテはあそこまでしてくれたんだろう？」

「え！？」

「自分の命も顧みず・・・・・・・・どうして？主と執事だからって・・・・・どうして？」

「それは・・・・・・」

突然のナギの言葉に、マリアは直ぐに返答できなかった。だが、その答えは一つしかない。それはナギがハヤテの一番大切な人だから。

「どうして・・・・・別に私が好きであったわけでもないのに・・・・」

その言葉を聞いて、マリアは決心した。

「ナギ・・・・・・・あなたに話さなきゃいけないことがあるの。」

「え！？」

今度はナギが驚いた。

「ナギ・・・・・・昼にハヤテ君にも言ったんだけど・・・・・・実はあのクリスマスのことは・・・」

マリアはハヤテに言ったことと同じことをナギに話した。

「そうか・・・・・・・私も2年間も片思いしてたのか・・・・・・・バカだな私・・・・・・けどなおさらハヤテは。」

「そう、ここからが大切なの。実はね、ハヤテ君は4人の告白を全て断わって、自分の決めた人に想いを告白することに決めたの。」

「ハヤテの決めた人？」

「そう。それは・・・・・・・・・あなたよナギ。」

そ言葉は、ナギの心をこの上なく揺さぶった。

「え！！！だって！！！」

「ハヤテ君は・・・・・2年間あなたと暮らして・・・・あなたが魅力的な女性であると思えるようになったの。そして想いが膨らんで。あなたが自分の大切な人、自分自身の守るべき人とわかったの。」

「そんな。」

「ハヤテ君はあなたを見つけたら直ぐに告白つもりだったんでしょうけど・・・・・・だからこそ、身を挺してあなたを守ったの。」

「・・・・・ハヤテ。」

その時、手術中のライトが消えた。

扉が開き、中から執刀医が出てきた。

「先生、ハヤテは？」

ナギが医師に詰め寄った。

「・・・・・・今晩が峠と思います。」

状況は思ったより悪いようだ。峠を迎えることは、本人が死の危機から脱していないことを意味していたからだ。

「どうして・・・・・だってハヤテは車に惹かれても死なない人間だぞ、どうしてそこまで悪化するんだ。」

半狂乱状態になりながら、ナギが言った。それをマリアが抑える。

「確かに彼の体の頑丈さは凄まじい物です。しかし、さすがに０距離から大型拳銃で撃たれて無事で済むはずがありません。一発は体を貫通こそしましたが、大した被害はありませんでした。しかし、もう一発は心臓近くに命中していました。即死しなかっただけでも奇跡です。・・・・・・・・あとは彼自身の気力と体力に任せるほかありません。」

そして、ハヤテがストレッチャーに乗せられ出てきた。酸素マスクがはめられ、点滴がさされたその姿は痛々しい。そのまま個室に運ばれていった。

「マリア・・・・私はハヤテが目覚めるまでここを離れないからな。」

ナギの一番長い夜の始まりであった。

語られる想い（後書き）

御意見・御感想お待ちししています。

分岐点

ハヤテは個室に運ばれた。ナギはハヤテの眠るベッドの直ぐ側で、ひたすら彼が目覚めるのを待つ。

病室には、ハヤテの心拍数や血圧を示す機械の音以外しない。

一分という時間さえもどかしい。

「ハヤテ、早く目を覚ませ。」

だが、ハヤテが目を覚ます様子は見られない。

何もないまま時間だけが過ぎていく。

そして、時計が１２時を指したころだった。

ピロリロ、ピロリロ！！

それまで一定のリズムの音を奏でていた医療機器が、突然警告音のような物を鳴らし始めた。

すぐにナギはナースコールを掛ける。

「機械が変な音を立てている。直ぐに見にきてくれ！！」

ナギの連絡を受け、数十秒後当直の医師と看護師がすっ飛んで来た。

彼らはすぐにハヤテの容態をみる。

「いかん！血圧と心拍数が低下している。君、すぐに昇圧剤を。それとＡＥＤの準備を！！」

「はい！！」

医師に指示され、看護師が走る。

ＡＥＤとは心停止の時使う蘇生機械だ。頭の良いナギにはすぐにわかった。そしてそれが、ハヤテがこのままでは危ないということも。

「ハヤテ！！」

ナギはベッドに近寄ろうとした。しかし。

「治療中です。下がってください。」

看護師によってナギは部屋の外に追い出されてしまった。

そしてしばらくしたとき。

ピー！！という機械音が聞こえてきた。心停止を指す音である。

「・・・・・・そんな！！」

ナギにはその音が信じられなかった。

室内では医師たちが叫び、懸命にハヤテに対して治療を施してい

る。

ナギにはそれを見ることさえも出来なかった。

何も出来ない自分にもどかしさを感じる。そして、ハヤテがこのまま死んでしまうのではないかと言う恐怖も。

「ハヤテ・・・・・・・嫌だハヤテ・・・・・まだお互いちゃんと告白してないんぞ！！こんな風にわかれるなんて嫌だ！！ハヤテ！！・・・・・・お願い神様、ハヤテを向こうに連れて行かないで！！」

ナギは両手を合わせてひたすら祈った。

ハヤテは真っ白な空間に自分が立っているのに気づいた。

「ここはどこだ？」

白1色だけの世界。強いて言うなら雲の中のようにも見える。

「一体ここは。」

ハヤテは何気なく歩いていってみる。

白い空間はまるでどこまでも続いているようだった。しかし、ふいに周りにも沢山の人が自分と同じように歩いているのが見えた。

その姿は老若男女さまざまだ。そしてその目に生気は見られない。

ハヤテは恐怖を覚えながらも、彼らについていく。

しばらく歩くと、目の前に川が現れた。

ハヤテはその川の手前で歩を止めた。しかし、他の人たちは次々と対岸へ向かって、川の中を歩いていく。深さはほとんどないようだ。

ハヤテは辺りを見回してみた。

すると、ぽつんと一つ、看板のような物が見えた。それに近づいてみる。

そこに書かれていたのは。

「特級河川三途の川」

（何ですかこの現代っぽさ丸出しの看板は！！）

と、何気なく突っ込んでみるが、とりあえずこの川が三途の川、つまりあの世とこの世の分岐点であることがわかった。

（ここを渡ったら、僕は死ぬのか？）

ハヤテの心の中に、二つの自分が現れた。

「死んではいけない！お嬢様が悲しんでしまう！！まだ想いも伝え

ていないのに、絶対に死んでは駄目！！」

という死反対派と。

「いや、お嬢様を守って死ぬんだ、本望じゃないか。だいたい元はお前がお嬢様の気持ちに気づかなかったのが原因じゃないか！！ここは死んで償え！！」

という死賛成派。二つの心がせめぎ合う。

しかし、徐々に賛成派の心にハヤテは傾いていく。さらに、心の中に誰かが呼びかけてきた。

（君もこっちに来いよ。あの世はいいぞ、苦しみも悲しみもない世界だ。生きていたときのつらいことも何かももう省みなくていいんだぞ。）

まさに悪魔の囁き。しかし、その囁きにハヤテは屈した。

一歩、また一歩と川に向かって足を進めていく。そして、ついに右足が三途の川に浸る。

分岐点（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

願い

ハヤテは三途の川を対岸へ向かって進んでいく。

（あっちにいけば苦しみも悲しみもないんだ。）

もう生きようという考えは脳裏から完全に消滅し、死による苦痛からの解放へと考えが行ってしまっている。

あと少しで彼はあの世の住民となる。つまり死ぬのだ。

もはや彼には死しかないのか？

と、その時。

「ハヤテ君。」

突然声が掛けられた。

一心不乱に対岸に向かっていた足が、その声によって止まる。

「だ、誰です？」

ハヤテは辺りを見回してみる。すると、対岸から何か視線を感じる。そしてそちらの方を見てみる。するとそこには二人の若い男女が並んで立っていた。

二人とも年格好から見てまだ３０前のようだ。男性の方は見覚えはない。しかし、女性の方は一度会ったことのあるような気がした。

ハヤテは記憶の糸を辿った。そして。

「あなたは・・・・・確かナギお嬢様のお母さん。」

そこにいたのは、１０年前に亡くなったナギの母親である紫子であった。ハヤテは彼女と一度会った事があった。２年前、伊豆の下田で、ハヤテの意識の中に彼女が現れている。

「そう、ナギの母の紫子よハヤテ君。そしてこっちが夫よ。」

なんと男性の方はナギの父親であった。ちなみに彼はナギの物心つくまえに亡くなっている。

「で、お二人が僕に何の用でしょうか？」

ハヤテの質問に答えたのは紫子であった。

「ハヤテ君。あなたはまだこちらに来ては駄目よ。今ならまだ間に合うわ。あなたには生きていって欲しいの。」

どうやらハヤテを説得したいようだ。

「・・・・・・・」

「ハヤテ君。あなたが死によって苦痛から解放されると思うのなら、それはただの逃避よ。あなたはただ逃げているだけよ。」

「僕が、逃げてる？」

「そう。まだ生きていけるのに現実から逃げているだけよ。」

ハヤテの心に迷いが生じる。

確かに辛い現実から逃げようとしていただけかもしれない。

「お願い。あの娘のためを思うなら死なないで。」

あの娘とはナギのことだろう。確かに、彼女に本当の気持ちを言わずに去っていいものか。しかし、また彼女の気持ちに気づいてあげれず、命の危機にさらした自分が生きていっていいものかという考えも浮かんでくる。

「けど、僕は・・・・・」

迷うハヤテに向かって話し掛けたのはナギの父親であった。

「君には、君を心から待っている人がいる。もちろん、君はもうわかっているはずだ。私たちはあの娘をもう支えてあげる事はも、直接愛してあげることも出来ない。だから、君があの娘を愛して、支えていって欲しい。私たちの分まで。大丈夫、君ならあの娘と心を通わせれると私たちは信じてる。」

その言葉に、ハヤテの心は突き動かされた。

「お嬢様・・・・・」

「ハヤテ君。これからも辛いことはあるかもしれないけど、ナギのことをよろしくお願いね。あの娘は心からあなたを愛してるわ。そして君もナギのことを選んでくれた。だから生きていってね。私た

ちはいつまでもあなた達のことを見守っているから。」

そう彼女が言い終わった途端、あたりが強い光に包まれ、ハヤテは意識を失った。

ハヤテの意識が再び戻り始めた。

すると、少女の声が耳に入ってきた。

「ハヤテ！！私だ！！」

聞きなれた声。

体の感覚が戻ってくるが、まるで鉛のように重い。それに顔面には何かがくっついている感触がする。

まぶたを少しずつ開けていく。白い天井と蛍光灯の光がまぶしいぐらいに入ってくる。

顔の異物は酸素マスクであった。

そうやって思考を巡らせていくと、ようやく自分に声がかけられているのがわかった。

「ハヤテ、ハヤテ！！私だ、ナギだ。わかるなら手を握り返してくれ！！」

少し視線をずらしてみると、ナギの姿が見えた。そしてその手が自分の手を握っているのも。

ハヤテは言われたとおり握り返した。重い体に精一杯の力を入れる。

それは普段のハヤテからすればあまりに弱弱しい力であった。だが、確かにそれはナギにはわかった。

「は、ハヤテ！！！」

その瞬間ナギは泣き出していた。愛する人が、死のふちから戻った喜びに。

願い（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

想いが通じる時

意識を取り戻したハヤテの回復は早かった。

医者曰く。

「命に関わる怪我をしたのに、意識を取り出した僅か数時間でここまで回復するとは。体の頑丈さといい、まったくすごい少年だよ。」

その後、ハヤテは会話できるまで回復した。

今病室にはナギとハヤテの二人だけだ。

「良かったハヤテ。本当に心配したんだぞ。お前が心停止を起こしたときは、私・・・・」

「お嬢様・・・・・すいません。ご迷惑をお掛けして。けど本当にお礼を言うなら、お嬢様のご両親でしょう。」

ナギはハヤテの言った言葉に強く引かれた。

「私の！？」

「ええ。実は僕は三途の川を渡りそうに成ったんです。そこへお二人が現れて。僕を引き止めてくれたんです。もしお二人が止めてくれなかったら、今ごろ僕は死んでいたでしょう。」

「そうか・・・・・母と父が・・・・・また墓参りしてお礼を言わなくちゃな。」

「ええ、それが良いでしょう。・・・・・・・・・あと、お二人は僕に、お嬢様のことをよろしくと。」

「え！？」

少しの間沈黙する二人。

「・・・・・お嬢様。あの、僕は・・」

「待って！！先に私に言わせてくれ。ハヤテ、私はお前のことが好きだ。３年前のクリスマスに会った時からずっと。」

まず、顔を真っ赤にしてナギが想いを伝えた。

「お嬢様。・・・・・僕はあの時・・・」

「わかってる。全部マリアから聞いた。」

ナギはハヤテの手術中にマリアからあのクリスマスのこと、そしてハヤテが誰に告白しようとしていたかを全て聞いていた。

「そうでしたか。お嬢様、僕もお嬢様のことが好きです。けど・・・・」

黙りこむハヤテ。

「けど何だ？」

「本当に僕で良いんですか？僕は未遂に終わったとはいえ、お嬢様

を誘拐しようとしましたし、それにお嬢様の気持ちにも気づいてあげれなかった。それについこの間まで借金を持っていた。そんな僕がお嬢様と付き合うなんて。だいち僕はお嬢様の執事ですし。」

とことん自分を卑屈する言葉を並べ立てるハヤテ。ナギはその言葉を最初静かに聞いていたが、突然予想外の行動に出た。ナギがハヤテに抱きついたのだ。

「え！お嬢様！？」

狼狽するハヤテ。

「ハヤテ・・・・・私は1人の男としてのハヤテが好きなんだ。身分や地位とか、財産とか、そんな物なんか関係ない。どんな境遇だろうと、私はハヤテが好きだ！！この世で一番。」

抱きついているせいでハヤテからは見えなかったが、ナギの顔はさらに真っ赤であった。恐らく彼女にしてみれば、人生最大の告白であったのであろう。

ハヤテはしばらく何かを考えていたようだが、決心したのか、ナギの背中に両腕を回した。

「ハヤテ？」

「僕のせいでお嬢様をまた危険に巻き込むかも知れません。僕のせいで批判の矢面に立たせてしまうかもしれません。それでも本当に良いのですか？」

「何度も言わせるな。何を言われようと私の考えは変わらない。私

はお前が好きだ！！」

今のナギの決意はダイヤモンドよりも固いであろう。

ハヤテの腹も決まった。ハヤテは腕に力を込め、ナギを抱きしめた。

「こんな僕でよければ。」

「ハヤテ・・・・・ありがとう。」

二人の想いが通じた瞬間であった。

しばらく抱擁していた二人。そして、少し体を離し、お互いを見詰め合った。そして・・・・・二人の影が一つになった。

その二人を扉の間から見つめている人物がいた。

「ナギお嬢様。それにハヤテ・・・・・二人が付き合うとはなあ。おっと、誰か来る。」

その人物は足早にそこを立ち去った。

この後、お見舞いに来たヒナギク、泉、歩、咲夜、そして伊澄の5人が病室の扉を開け、そこで衝撃のシーンに出くわし一騒動起こるが、それはまた「別の話」。

想いが通じる時（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

帝

3日後、ハヤテは退院し、三千院家に戻った。

「ただいま戻りました。」

帰ってきたハヤテをマリアとクラウスが迎えた。

「お帰りなさい、ハヤテ君。」

「全く、心配掛けおって。まあ命をかけお嬢様の命を守ったことは誉めてやろう。」

クラウスが珍しくハヤテを誉めた。

「はい、ご迷惑をお掛けしました。」

ハヤテの隣には、ナギが寄り添っている。

「ハヤテ、まだ言うことがあるだろう。」

「はい、お嬢様。あの・・・・・・僕とお嬢様は・・・・・付き合うことになりました。」

この言葉に、マリアは驚きはしなかったが、さすがにクラウスは驚きを隠さない。

「何だと!!お、お嬢様本当にハヤテと付き合う気ですか?」

「当たり前だ。何か文句があるのか？」

「だって、お嬢様。ハヤテはお嬢様の執事であったのですよ。そんな男と。」

やはり出た。しかし、ナギの決心は変わらない。

「もう決めたのだ。私は誰が何を言おうと、ハヤテと付き合う。ゆくゆくは・・・・・結婚する。」

最後はさすがに恥ずかしかったらしい。耳まで真っ赤である。ハヤテもほのかに顔が赤い。逆に、クラウスの顔は青ざめている。

「な、なんと。だ、だが・・・」

まだまだ言いたいことはあったのだが、そこにマリアが割り込んだ。

「何を言っても無駄ですよクラウスさん。あの子のあんな真剣な表情、凛とした意思を感じさせる言葉は聞いたことも見たこともありませんわ。それだけ本気と言うことです」

「ま、マリアまで。・・・・・・・・し、しかし帝様の意思に反することになったら。」

しかし、そのクラウスの危惧も、マリアの次の言葉によって粉々に打ち砕かれた。

「それも心配ありません。お爺様は認めるそうですよ。」

その台詞は、クラウスのみならず、ナギとハヤテにも驚きをもって迎えられた。

「な、何だと！！」

「あのクソジジイがすんななりと？」

「お嬢様のお爺様が認めた？」

まさに予想外のことであった。

「まあ、帝様も認めるなら良いが、しかしなあ。」

まだ釈然としない物があるようだが、結局クラウスも認めざる得なかった。

挨拶を終え、ハヤテは自分の部屋に戻った。

「ふう。」

あいさつで疲れたのか、ハヤテはベットに寝転がる。

しかし、そこへ声が掛けられた。

「さすがにお疲れの様だな少年よ。」

聞き覚えのある老人の声。ハヤテは飛び起きた。

「久しぶりだな。」

「帝お爺様。」

そこに立っていたのは、ナギの祖父にして三千院家本家の当主、三千院帝であった。

「どうしてここに？」

「お忍びじゃよ。さて、お前さんナギと付き合うことにしたそうだな。」

「はい。あの、実は誤らなくちゃいけないんです。あの、戴いたペンダントが銃弾を受けて・・・・割れて粉々になってしまって。」

2年前、帝から人生の道しるべとして渡されたペンダント。ずっと肌身離さず付けていたが、それが今回の事件で銃弾があたり、粉々に割れてしまったのだ。

とりあえずそれを謝ったのであるが、それに対し帝は笑い始めた。

「！？」

「ハハハ、実は本当の事を言うと、あのペンダントは不幸を呼び寄せるペンダントだったんだ。」

「え！？」

と、そこでハヤテはあのペンダントを貰ったころ、輪を掛けて不幸が降りかかってきたことを思い出した。

「数々の不幸や苦難を乗り越えて幸せを掴んでこそ、人生とは価値のある物になる。あのペンダントが割れたということは、お前さんは最大の苦難を乗り越え、幸せを掴み人生を価値あるものにしたということだ。」

最大の苦難とは、恐らく今回生死の境を彷徨たことだろう。幸せとは言うまでも無いことだろう。

「じゃからこそ、お前とナギの間を認めたのじゃ。まあ今回言いたかったのはそれだけだ。積もる話はまたこっちに来てゆっくりと話し合おう。そろそろ戻らんと、屋敷の者が騒ぎ始めるのでな。」

そして彼は部屋から出て行こうとする。

「おっと、後一つ。あいつは気難しいぞ。お前さんの手に負えるかな？」

帝の最終確認。しかし、ハヤテは屈託のない笑顔で答えた。

「その自信がなかったら、付き合おうなんて考えませんよ。」

「ふ。その言葉を聞いて安心したぞ。それじゃあな少年。」

こうして、帝は去っていった。

帝（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

来訪者

1人の青年が、三千院家の広大な敷地を見ていた。

「三千院家か・・・・・・2年半ぶりだな。」

その青年は呟くと同時に、屋敷へ向かって歩き始めた。

２００６年９月　三千院家

ハヤテとナギがカップルと成った後も、特に屋敷の生活に変わりはない。もともと3人しか住んでいなかっただけに、屋敷内の雰囲気はアットホームな感じであったのだ。もっとも、では何も変わらなかったかと言えば、そうでもない。

ナギの場合それが顕著と言えた。ハヤテがフリーとなり、自分との時間が出来ると直ぐに話題にするのは結婚のことだ。

恋愛をすっ飛ばしていきなり結婚とは驚きであるが、まあ2年一緒に暮らして本人はずっと好きであったのだから、納得できないこともない。それにハヤテも反対してはいなかったし。ただし、例えどんなにナギが結婚を急いでも、まだ彼女自身１５歳であるのだからしたくても法律上出来ない。

日本の民法７３１条では、男子１８歳、女子１６歳でなければ結婚は出来ないのだ。

まあそういうわけで、今日もナギはその事についてハヤテと話していた。

「やっぱりクリスマスにしよう。二人が出会った日だし、その日なら私も誕生日を過ぎている。」

「しかし、年の瀬は忙しいですよ。それにまだ高校を卒業していませんし。やっぱりジュンブライド（6月の結婚式）の方がよくありませんか。」

二人は結婚式の時期を決めていた。

ナギにしてみれば善は急げという考えから、先ほどの理由も兼ねてクリスマスを希望した。

しかしハヤテは先ほどの理由も加え、気持ちの準備も考え来年に延ばそうと考えていた。

もっとも、そうパッと決まるわけでもない。招待する側の都合や、親族との兼ね合いも必要なのだ。

二人がそうやって色々思案していた所へ、マリアが入ってきた。

「おふたりともお話中の所すいません。実はお客様がお見えになっていて。」

その言葉にナギが怪訝な表情をする、来客の予定はない。しかし、ナギを突然訪ねてくる人も少ない。

「私に？誰だ？」

「お会いすればわかりますよ。どうぞ、お入りください。」

マリアに促され一人の青年が部屋に入ってきた。

「お久しぶりですナギお嬢様。そしてハヤテ。」

そこいたのは、ハヤテから見て2、3歳上の感じの温厚そうな青年であった。

その人物を見て、ナギとハヤテが同時に叫んだ。

「姫神！！」

「勝兄さん！！」

その途端、二人は顔を見合わせた。

「ハヤテ、兄さんってどういうことだ！？こいつはお前の前任の執事だった姫神だぞ！！」

「僕の方こそ。兄さんがあの姫神さんって！？」

その人物はナギとマリアからしてみればハヤテの前任の姫神。そしてハヤテから見たら5年前に行方不明になった兄の綾崎勝であった。

「二人とも驚きだろうな。まあマリアさんがお茶を持ってきてくれたらゆっくり話しまし

ょう。」

数分後、お茶を飲みながらソファーに座る４人の姿があった。

「で、どういうことなのだ姫神？」

「はい、実は・・・・・」

姫神の話によれば５年前、親の賭博癖に嫌気がさした彼は家を飛び出した。もちろん行くあてなどどこにもなかったが、ちょうどその時、三千院家の執事の求人情報を聞きつけ応募したとのことだ。そして合格し、三千院家で働いたそうだ。その時、親との関係を断つ意味で母方の旧姓の姫神を名乗り、今に至るそうだ。

「これが、自分がここのかつての執事姫神と、ハヤテの兄勝と同一人物である理由です。」

言い終えて、彼は紅茶を飲み干す。

「なるほど、だからあなたもハヤテ君みたいに体が頑丈だったわけですね。兄弟なら納得いきます。」

何度も屋敷を破壊されて被害を被ったマリアが納得の表情で言った。

「しかし、今さら何故来たのだ。あの時一方的にやめたのはお前ではないか。」

ナギが少し冷たく言う。そう、実は姫神はかつて自分から突然屋敷を出たのだ。ナギにしてみれば、その時裏切られた気持ちがあっ

た。

「それについても話しましょう。今日ここへ来た理由は、３つあります。」

来訪者（後書き）

御意見・御感想おまちしています。

姫神の今

「今日ここに来た理由は3つあります。1つ目はハヤテの見舞いです。人づてにハヤテが大怪我したと聞いたので。まあ、とりあえず回復したのでほっとしてるよ。それにまさかナギお嬢様とくっつくとは思わなかったぞ。」

微笑しながら答える勝。

「けど兄さん。どうして音信不通だったんですか? 僕は心配してたんですよ。」

「ふざけるな。常に転居して所在不明のお前を探すのなんか不可能だわ。俺だってどれだけ心配したか。」

これには返す言葉もない。確かにハヤテは借金取りから逃げるため転居を繰り返した。そのため定住することは殆どなく、言われれば連絡を取るなど不可能だった。

「まあなんにしても無事でよかった。それについては俺からもナギお嬢様はに礼を言わなくちゃな。」

「礼は良いから、はやく他の理由も話せ。」

ぞんざいにそう答えるナギ。

ナギはあまり勝と一緒にいたくない様だ。

「ハハハ・・・・わかりました。2つ目は近況報告です。実はここ

をやめたあと、自分で起業しましてね。こういう会社をやっています。」

そう言って名刺を渡す勝。

「何？ＴＯＭＯＲＲＯＷ　ＣＲＥＡＴＩＶＥだと。一体なんの会社だ？」

「実は、アニメ製作会社なんですよ。」

その言葉に、ナギの目が輝く。

「何、アニメ製作会社だと！！」

「うわ！！」

いきなり立ち上がったナギに驚くハヤテ。

「お嬢様、いきなり立ち上がらなくても。」

と、そこでナギがハヤテの言葉に敏感に反応した。

「こらハヤテ！！こういうプライベートな場ではお嬢様を付けないと約束しただろ！！」

「あ、すいません。」

実は、ハヤテとナギは普段こそ以前と変わらぬ呼称を使っているが、プライベートではハヤテはナギさんと言うことを決めていた。ナギとしては呼び捨てにして欲しかったようだが、さすがにハヤテ

もいきなりそれは出来ないため、結局妥協してこうなった。

話が脱線してしまった。

「で、何で姫神はアニメ会社など立ち上げたのだ？」

「いや、この屋敷でアニメとか漫画とか見ているうちに、自分もこの手の仕事をしてみたくなって。屋敷で働いた分の蓄えもそれなりにあったし。まあ最初のうちは大手の下請けとかしかやっていませんでしたが、最近の秋葉ブームも追い風になってそれなりに成長して、今年からはオリジナルのアニメの製作もスタートして、業績も順調に伸びています。」

うれしそうに話す勝。一方、ナギはその話しを聞きながら何か思案しているようだ。そして、何か考え付いたようだ。

「なあ、姫神・・・」

と、そこで勝は立ち上がった。

「ちょっとハヤテ来い。」

部屋の隅にハヤテを呼びつける。

「何ですか兄さん。」

「おい。ナギお嬢様の漫画のレベルはどうなった？」

「え？ええとですね、1年ぐらい前から通信講座を取っているので、それなりに上達はしてはいますよ。」

「そうか・・・・・ありがとう。」

そして二人はソファーに座る。

「一体何を話していたのだ？」

「いえ、別に気にするような事ではありません。で、さっきの続きですが、何でした？」

「うん、実はお前の会社に出資するから、私の漫画をアニメにしてはくれないか？」

やっぱりという表情をする勝。

「はあ、とりあえず社の企画会議で検討させていただきます。」

勝はとりあえずそうやってお茶を濁した。

「で、兄さん。３つ目の理由は何ですか？」

ハヤテが聞いてみる。

「うん！？ああ、３つ目はな・・・・・・・・・」

そう言って、勝は口ごもった。

姫神の今（後書き）

御意見・御感想おまちしています。

告白

勝はだまりこんだまま、中々先を話そうとしない。

「・・・・・・」

その様子を、ハヤテが見かねて言った。

「大丈夫ですか兄さん？よっぽど言いにくいことなんですか？」

「いや・・・・その・・・・・・」

よく見ると、その顔は真っ赤である。そして、先ほどからチラチラとマリアの方を見ている。

ここで、ようやくハヤテとナギは気づいた。

「姫神、お前まさか・・・」

「マリアさんのことが・・・・・・好きなんですか？」

その言葉に驚いたのはマリア自身であった。

「え！？う、うそ！！」

「・・・・・・・・」

勝はまだ黙ったままだ。

「どうなのだ姫神！？」

ナギがさらに追求する。

「・・・・・そう。マリアさんのことが好きで、告白に来たんです。」

さらに顔を赤めながら、ついに核心を言った勝。

一方、言われたマリアはまだ信じられないようだ。

「あの、何かの悪い冗談でしょうか姫神さん？」

普段はハヤテを天然ジゴロなどとこき下ろしているが、実は彼女自身恋愛経験は全くない。だからこんな返答をしてしまった。

しかし、勝は本気であった。こんな答えをされるのは少し心外であった。

「冗談じゃありません。本当にあなたが好きなんです。付き合って下さいマリアさん！！」

マリアに面と向かって言う勝。その表情は真剣そのものであった。

ようやく、マリアも彼が本気であることを認めたようだ。そして彼女の顔も真っ赤になる。

「ええと・・・・・・・その・・・・・・・こんな私でよければ。」

その言葉が彼女の口から漏れる。

その途端、勝の嬉しさで一杯になる。

「ありがとうございます。」

こうして、新たなカップルが誕生した。

二人が落ち着いたところで、再び４人での会話がスタートする。

「けど兄さん。兄さんは前からマリアさんが好きだったようですけど、どうしてこの屋敷にいた時に告白しなかったんですか？いくらでもチャンスはあったはずですが？」

これはナギもマリアも疑問にしていることであった。

それに対し、勝は笑いながら話す。

「いや、あの時はまだナギお嬢様がマリアさんを随分頼りにしていたときだから。とても告白できるなんて雰囲気じゃなかったし。それに、帝様の気分も損ねてしまうかもしれなかったし。あの人を怒らせたら俺なんか殺されかねんからな。」

それにナギが納得する。

「確かに、あの時点でマリアと付き合いたいなんて言ったら私は怒っただろうな。それにあのジジイも。」

しかし、新たな疑問も浮ぶ。

「けどだったらどうして屋敷を出て行ったんです？そのまま何年か待てば良かったんじゃ？」

ハヤテがもっともなことを指摘した。しかし、勝はそれに首を振った。

「確かにそうだったんだろうけど。目の前に好きな人がいて告白できないもどかしさは並大抵の物じゃなかったんだ。いつ自分の気持ちが暴走するかわからなかった。だからその前にここをやめることにしたんだ。そうした方が良いと思ったから。これが、俺がこの屋敷を出た原因さ。」

簡単に言えば恋わずらいだ。

「けど、ようやく気持ちも落ち着いて、そして2年経った。それにお前（ハヤテ）がここにいると聞きつけたから訪ねたわけです。まあとにかく、今後ともよろしくお願いします。」

そう言って、彼はハヤテたちに頭を下げた。

それに対し3人とも笑顔で返す。

「ああ。いくらでも家を訪ねるが良い。私達は大歓迎だ。」

「兄さん。お互いがんばっていきましょう。」

「これからは恋人としてお願いします。」

こうして、彼らの新しいスタートが切られた。

告白（後書き）

御意見・御感想おまちしています。

クリスマスパーティー

２００６年クリスマス　三千院家

ハヤテとナギが婚約した年ももう直ぐ終わろうとしていた。そんな中、この日三千院家ではナギ主催のクリスマスパーティーが開かれていた。

結局、ハヤテたちの結婚式はマリアと勝の式にあわせるため来年に持ち越しとなった。そのため，代わりに開かれたのが今回のパーティーである。ナギとしてはハヤテと初めてあった重要な日であるから開いたのだ。

もっとも、この時期海外で年越しする人も多いため、出席している人数は少ない。まあ人嫌いのナギにはそれはそれで都合が良かったが、というわけで今屋敷にいるのはハヤテとナギ、そして招かれたワタルとそのメイドのサキ、そして西沢姉弟と愛沢咲夜である。

ちなみに、マリアと勝は二人でクリスマスデートに出て行っているため今回は出席していない。

それともう1人いた。それは三千院家の執事長クラウス・・・・・・・・ではない。彼は例によって出張中である。

では誰かというと。

「ハヤテさん、料理をお持ちしました。」

「ああ、健二君。ご苦労様。」

健二と呼ばれたその人物。歳は１５歳前後、ナギと同世代と見える少年である。三千院家の執事服を身にまとったその少年、名を大畑健二という。新しく三千院家にやってきた執事見習いだ。

これはハヤテやマリアがそれぞれ使用人をやめた場合に備えて新たな執事を雇ってはというクラウスの提案がそもそもの原因であった。人嫌いのナギではあったが、確かに新たな使用人を雇うことで、ハヤテやマリアの自由時間が増えるのは大歓迎である。そこで、自分が選ぶという条件付で、新たな執事を雇うことにした。

そしてナギが選んだのが健二である。

ちなみに、彼とナギが出会ったのはハヤテが入院中の病院での話で、その時ハヤテと一緒に彼と会ったのだ。もっとも、なんと彼はその時病院で掃除夫として働いていたが。

ナギとハヤテが彼に聞いたところでは、彼は今高校1年生で両親は既に他界していて身寄りもなく、アルバイトをしてなんとか学費と生活費を工面していたのだという。借金こそなかったが、ハヤテと境遇は少し似ている。ただし、彼自身が優秀なのはナギもハヤテも見ていて直ぐにわかった。

というわけで、早速彼を採用したわけである。もちろん、採用後直ぐに白皇学院に編入している。ちなみにその時の編入テストでは全科目満点でパスしていることから、ナギやハヤテの目が間違って

いなかったことがわかる。

というわけで、彼はハヤテに教えられながら、日々執事としての能力を高めていた。ちなみに、必殺技はまだ持っていない。

ハヤテはその彼にも仕事を切り上げパーティーに加わるよう促す。

と、そこで彼は1人立っているワタルに近づいた。ちなみに、帝が働いてくれたおかげでワタルとナギの婚約は破棄になっている。

「ワタル君、どうしたんです？」

「あ、ハヤテ？」

彼のハヤテに関する呼称は以前と変わっている。かつては借金執事だったが、今はハヤテである。

「何か元気がありませんよ？」

そう、今日のワタルは元気がないように見えた。もっともハヤテにも理由が思い当たらないことはない。

「伊澄さんがいないせいですか？」

その途端、ワタルは顔を赤らめた。どうやら図星のようだ。

彼が想いを寄せる鷺ノ宮伊澄はあいにくと来ていない。理由は簡単。迷子である。彼女は原作を読んでもわかるとおり、超弩級の方向音痴なのだ。

「けど、ワタル君ももう卒業ですし。自分の想いを伝えてみてはどうですか？」

ワタルの片思いはかれこれ2年以上続いている。確かに、このままでは埒があかない。ハヤテ自身、いつまでも想いを抱え込むのは勝やナギを見て苦しいことと考えていた。そこでこう言ったのである。しかし、ワタルの顔は憂鬱そうなままである。

「そりゃまあ考えては見たけど。なんか俺みたいなのがあいつに告白する資格なんかあるのかなと思って。」

ワタルの言うのは恐らく体裁のことであろう。彼の恋する伊澄の家は名家であり、資産レベルも充分三千院家に並ぶ。それに対し、ワタルの家が持つ橘グループは確かに最近彼の努力が実って事業を大きくしているものの、未だ没落した状態から抜けきっていない。それどころか資産的には油田を掘り当て富豪となったハヤテにも追いついていないのだ。彼の悩みも深いはずである。

クリスマスパーティー（後書き）

大畑健二は作者によるオリキャラです。ちなみに名前の元はあの方です。

御意見・御感想おまちしています。

伊澄

ハヤテとの会話を終えると、ワタルは1人部屋を出た。気持ちを整理したかったからだ。

「恋愛か・・・・」

彼にはハヤテに言われた言葉がどうしても心の中に引っかかっていた。

ハヤテは会話の最後でこう言った。

「人を好きになることに身分とか財産とかそう言う物は関係ないと思いますよ。そう言うものは努力したり、運次第で手に入る物です。事実僕もそうでした。けど、人が誰かと付き合っていくのは気持ち次第です。お互いに想いが通じさえすれば良いんです。現に僕とナギお嬢様もそうでした。ワタル君の伊澄さんへの気持ちも、付き合ってみれば通じる物かもしれない。まず伊澄さんに自分の気持ちを伝えてはどうですか？」

この言葉が何度も脳裏をよぎる。

「気持ちを伝えるか？」

と、そこでワタルはあることに気づいた。

もしかしたら自分はただ逃げていただけではないのか？告白して断わられることを恐れていただけなのではないか、それを糊塗するために体裁のことを口に出していたのではないかと。

思い出せば2年前、一度偶然伊澄の前で好きと言ってしまったことがあった。それなのに、その時は自分の気持ちを偽ってしまった。あれこそその証明ではないのかと。

「俺に、ただ伊澄に本当の気持ちを伝えようとする勇気がないだけなのかな？」

考えれば考えるほどその思いが強くなる。

「本当のことをまず伊澄に言ってみるべきなのかな？」

しかし、頭の中でそれを考えることすらできない。いや、自分自身で打ち消してしまう。

「クソ！！やっぱり俺自身に勇気がないだけなのか？」

自分自身が情けなくなってくる。あの借金執事だったハヤテさえ、主人であったナギに告白したというのに。それなのに、以前彼を見下していた自分はそれさえもできないのか。

「ちくしょう！そめて本当の気持ちが言えさいすれば・・・・・・伊澄、俺はお前のことが好きだ！！」

本音を口に出して言ってみるが、やはり本人がいなければただの虚しい独り言である。

言ってみて余計に自分自身が情けなくなってくる。考えること事態バカバカしくなってきた。

「戻ろう。」

そう言って、皆がいる部屋に戻ろうとしたとき、どこからか声が掛けられる。

「ワタル君。」

「え！！」

驚くワタル。

聞きなれたそのかわいらしい声、特徴のあるゆっくりとした物言い。間違いない。ついさっき独り言で好きと言った相手の物だ。

「まさか！？」

振り向くと、そこにその相手の少女、和服姿の鷺ノ宮伊澄が立っていた。

「い、伊澄！！どうしてここに！？」

なんで彼女がここにいるんだ？と本気で驚いてしまうワタル。

「なんとか屋敷には辿り着いたけど、また道に迷ってしまって・・・・・それよりも、さっき言ったことは本当ですか？私が好きだというのは？」

「え！？」

まさかさっき考えていたことがこうも早く現実の物になってし

まうなんて。

「いや、その・・・・」

心臓の鼓動が早くなり、体温が急激に上昇する。見ると、伊澄も顔を真っ赤にしている。

さあ、どうする？彼にとって一世一代の大勝負の時であった。

伊澄（後書き）

御意見・御感想おまちしています。

迷い

「ワタル君は本当に私のことが好きなんですか？」

伊澄が聞いてくる。

ワタルは黙ってしまった。

「・・・・・・・・」

「何で黙るの？」

心の中で葛藤が起きるワタル。

（どうする？やっぱり言うべきなのか？）

「また、２年前みたいに冗談だったの？」

さすがにその言葉には、反論するべきと思ったのか。彼は口を開いた。

「いや・・・・・そういうわけじゃ。」

「じゃあ、やっぱり本当なんですか？」

今こそ勝負のときだ！！ついに彼は意を決した。

「うん、そう。俺はお前のことが好きだ。伊澄。」

ついに告白したワタル。しかし、その後しばし二人とも何と言ってよいかわからず沈黙。

「「・・・・・・」」

長い沈黙。その沈黙を破ったのはワタルの方であった。

「やっぱ、俺みたいな男じゃ嫌かな・・・・」

その台詞に対して、伊澄が口を開いた。

「いえ、あの。別に嫌ってことではありません。ワタル君の気持ちは以前から咲夜が言っていましたし。」

どうやら咲夜がワタルの気持ちをそれとなく彼女に言っていたらしい。もっともワタルにしてみれば。

（余計なことを。）

というのが本音であった。まあ彼らしいと言えば彼らしい。

「それに、今ワタル君に好きと言われて嬉しいとも思っています。けど。」

そこまで言って伊澄が何か言いにくそうな表情になった。

「けど？」

この、けどの2文字にワタルは大いに気になる。やっぱり駄目なのか。

「けど、なんなんだよ？」

「私。直にワタル君と付き合ったことがないので、それで。返事に迷ってしまって。」

「え！？」

その言葉に、少しばかりショックを受けるワタル。確かに、考えてみると今まで伊澄と長い時間一緒にいた例はあまりない。友達とはいえるが、そこまで深い関係でもなかった。どちらかと言うと知り合い程度と言えた。そう考えれば、お互い相手を知っているようで知らない。

「だから、その。どう言ったら良い物か迷って。まだワタル君の気持ちを受け入れるほど
私はワタル君のことを知りませんし、かといって断わる理由もありませんし。」

なるほど、難しい問題である。

もっとも、ワタルも成長している。無理強いしてまで伊澄と付き合う気はない。そこで。

「だったら、まだ良いぜ。」

「え！？」

「だから、答えはまだ良いってこと。お前の気持ちがちゃんとしていない時に無理に付き合ってもらっても嬉しくないし。だから、気

持ちの整理がついたら言ってくれれば良いよ。それまで、俺をしっかり見て、評価してくれよな。俺もがんばるから。」

そう言ったワタルの姿はかっこよかった。というのが伊澄の後日談だ。まあこの言葉が、ワタルに対する彼女の評価を大いに上げたことは確かであった。実際、このやりとりで伊澄の中の認識では、ワタルは人想いの優しい人間となったからだ。

「じゃあとりあえず皆のところへ行こうぜ。」

そう言って、ワタルは伊澄の手を取った。

それに対して、伊澄はほんのり顔を赤くした。

「え・・・ええ。」

２人は皆がパーティーをしている部屋に歩いていった。

この後、ワタルは今までにもがんばった。そして３ヵ月後、伊澄から返事を貰うこととなる。その結果は、まあお分かりであろう。

一方、このパーティーの最中に出会った咲夜と一樹が何故か付き合うようになったのだが、それはまた別のお話。

まあこのパーティーは多くの人間に実り多い物となったのだけは確かである。

こうして、彼らの２００７年は幕を閉じたのであった。

迷い（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

生徒会長の憂鬱

年は変わって２００７年1月１０日、白皇学院の３学期が始まった。

３年生は大学受験へのラストスパートのころである。もっとも、卒業後就職する者とか推薦合格者は既に勉強を終え、高校生活の最後を謳歌している。

そんな中、推薦で大学を決めているにも関わらず、憂鬱な日々をすごしている人物もいた。

その人の名は桂ヒナギク。言わずと知れた生徒会長である。その彼女、去年ハヤテに告白し、その後失恋した痛手から中々回復できずにいた。

２年も一途に追いかけていた相手だけに、その衝撃は大きかったのだ。これが歩のようにライバルがいるという前提があったならばもっとショックも小さかっただろうが、生憎とライバルの中にナギを数えていなかったため、そうはならなかった。まあそんな心理状況でも面接と小論文試験をしっかりパスしたのは凄いといえるが。

その彼女はここの所生徒会室で1人ため息をつきながら過ごすことが多くなっていた。３年なら普通は生徒会長をやらなくて良いのだが、早いうちに進学先が決まったため、理事長の強い薦めもあり、卒業まで続投という異例の状況となっていた。

「はああ。」

何度目かわからないため息が彼女の口から漏れる。

「なんでこんなに心がモヤモヤするんだろう？」

彼女自身、自分にあきらめろと言いつづけている。しかしなぜか納得がいかない、あきらめがつかないのだ。初恋（原作では明らかになっていません。作者注）であったからかもしれない。

「私ってだめだな。」

日常生活では隠しているが、この生徒会室に入ってしまうと本音が出てしまう。

３年前のひな祭り。自分の誕生日であったその日、彼女はハヤテに恋をした。未だその思い出が忘れらない。そういう場所だからこそこうなってしまっているのかもしれない。

「散歩でもしてこようかしら。」

気晴らしに時計塔の外に出る。

白皇学院の敷地は広い。移動するのに路面電車が必要な程だ。もっとも、中心にある時計塔の周りにも木々が植えられ、絶好の散歩スポットである。

歩いているうちに、ヒナギクはある場所にやってきた。

かつてハヤテと初めてあった場所である。

「確か、あそこの木に私が登っているところへ、ハヤテ君がやって

きたのよね。」

かつて自身がチャ―坊と呼んだ雀の巣があった木。そこへゆっくりと近づいていく。と、そこで気付いた。

「あら？」

その木に誰かが登っているようだ。

「誰かしら？」

さらに近づいて見てみると、その人物は執事服に身を包んでいる。

「まさか、ハヤテ君？」

そう言う間に、その人物は木から下りて来た。ヒナギクはその人物に近寄ってみる。

そこで向こうも彼女に気付いたらしく正面を彼女に向けた。

その人物が着ていたのは紛れもなく三千院家の執事服であった。しかし、明らかにハヤテとは別人であった。

その人物と目が合う。

「え、ええと。あなたは？」

「僕は3年の大畑健二です。あなたは確か生徒会長の桂さんですね。」

彼女はその名前に聞き覚えがあった。

「あなた確か三千院家の？」

「はい、執事見習いです。」

それが彼とヒナギクの最初の出会いであった。

大畑健二プロフィール

年齢１８歳　誕生日７月７日　血液型Ｏ型　身長１７０ｃｍ　体重５５ｋｇ（体脂肪率は一桁）

家族構成なし　好き・得意　ピアノ　細やかな配慮　家事全般

苦手　敬語調以外で喋ること

借金なしのハヤテと思ってくれればわかりやすいと思います。

生徒会長の憂鬱（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

健二とヒナギク

「で、その三千院家の執事見習君がどうして木に登っていたのかしら？」

ヒナギクが疑問を口にした。

「あれです。」

そう言って彼は指差す。ヒナギクがそちらを見ると、鳥の巣があった。

「あれって、確か！？」

2年前ハヤテと初めて出会ったきっかけとなった、雀のチャ―坊の巣である。ちなみに、今はそのチャ―坊が親である。

「ええ、雀の巣です。さっきカラスが荒らそうとしていたんで、追っ払っていたんです。」

そう言って微笑む彼の姿は、どことなくハヤテに似ていた。そして彼女の脳裏に、2年前の思い出がよみがえる。

「あ！！」

ついつい口に出てしまった。

その様子を目にする健二。

「どうかしましたか、桂さん？」

「え！いや、ちょっと昔のことを思い出していただけよ。それにしても、あなたもハヤテくん見たいに敬語を使うのね？」

「ええ、敬語以外あまり使ってこなかったので。」

それは一体どういうことか？

「早いうちに両親が事故死して、僕はずっと目上の人の下で働いてきましたから、自然と敬語しか使わなくなってしまって。まあそれでも、親に捨てられ、借金を背負わされたハヤテさんに比べれば随分ましでしょうけど。」

それはまた重い話である。しかし、その言葉の中には恨みとか苦しいという感じはしなかった。もちろん、ハヤテでも同じ様に話をするが、しかし彼の場合はその中にも懐かしさとかそういう感じも込められているように彼女は感じた。

「あなた、随分重い人生なのに、あまり苦しいとか感じなかったの？」

「ぜんぜん。その時その時全力でやってきましたから。苦しいとかそういうものはありませんよ。」

なんて前向きに生きる青年だろう。ヒナギクはそんなことを感じてしまう。

「それよりも、良いんですか？生徒会長はお忙しいと聞いています。仕事の方は？」

と、ここで我に返るヒナギク。

「あ、そうだった。いけない！！ちょっと散歩するだけだったのに！まあ仕方ないわね。相手しくれてありがとう。」

時計を見ると、随分進んでいる。急いでヒナギクは戻ろうとする。

「忙しいなら手伝いましょうか？」

健二がここで意外な提案。

「え！いいの！？」

「ええ。まあずっととはいきませんけど、３０分ぐらいなら手伝えます。それに僕もおしゃべり出来て楽しかったので、お礼といってはなんですが。」

生徒会室は生徒会役員以外の出入りは禁止されている。だが、ヒナギクは何故だか彼のことを信用できた。

「じゃあお言葉にあまえるわ。」

そして二人は時計搭の生徒会室へ。

「けど、あなた書類仕事出来る？」

一応念のため確認。しかし、それは杞憂だった。

「ええ。書記・会計の仕事ならあらかたできますよ。」

というわけで、ヒナギクは彼に会計の仕事をやってもらうことにした。

分厚い書類の束を渡しながら言った。

「じゃあお願いね。３０分でできる範囲でいいわよ。」

そして自分自身は生徒会長席へ戻り、自分の仕事を始めた。

（けど、本当に大丈夫かしら？）

心の中でそう思うが、現実はまったく違っていた。

彼女が自分の席に座って１５分後。

「できましたよ桂さん。」

「え！！」

笑顔で書類を持ってきた彼に、信じられないといった表情を向ける。

「冗談じゃないわよね。」

「冗談言うなら、もっとましなこといいますよ。はい。」

ヒナギクは渡された書類に目を通す。確かに、不備は見られない。

「嘘！」

どう考えても普通なら3，４０分はかかりそうな量を。パーフェクトでやり遂げている。

「どうやらいいようですね。すいません、メールでハヤテさんから呼び出しがあったので、今日は失礼します。」

いきなり帰るという。ヒナギクが書類から視線を変える。

「え！ちょっと待って！」

しかし、彼女が彼のいたほうに目を向けた時、既に彼の姿はなかった。

健二とヒナギク（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

疑念

ヒナギクと健二が始めて会ってから2週間。あの後も健二は頻繁に生徒会室を訪ねては仕事の手伝いをしていた。そのおかげでヒナギクは随分と楽をさせてもらっていた。と、同時に、彼を気にする感情が日増しに強くなっていた。

なにせ健二は性格も温和、謙虚で勉強も力仕事も出来、そして細かいことにも配慮できる。しかも、どことなくハヤテを思わせる外観をしている。そしてハヤテのように不幸を呼び寄せるような性格でもない。おかげで彼の学校内での評判はすこぶる良い。

ところで、彼は現在3年であるが、ハヤテが初めて会った時、つまり去年は高校1年生であったと前述しいる。18歳なのに何故か？実は彼、2年ほど海外を回る捕鯨船や遠洋漁業に出て行ったため、こういう結果になっていた。しかし、白皇の編入試験では高校3年生に必要な知識を充分満たしているということで、異例の3年への飛び級となった。

閑話休題。

まあそんな彼に惹かれているヒナギク。そんな彼女の悩みは深い。

「どうしたらいいんだろう？」

かつてハヤテに感じた感情と同じ物であるから恋ということは直ぐにわかった。しかし、まだハヤテに告白してから数ヶ月しかたっていない今、告白していいものかという悩みが今の彼女の悩みであった。

普通だったらそんなこと気にするものでもないだろう。なにせ数ヶ月も前のことなのだ。
それも悩むのは真面目な彼女ならではだ。
「何がどうしたらいいのかな、ヒナ？」
突然声を掛けられた。
「うわ！！美希いつのまに入ってきたの？」
そこに立っていたのは、ヒナギクの友人である生徒会3人娘の1人、花菱美希であった。
「さっきからいたわ。それよりも、随分お悩みのようね。前ハヤ太君に恋したときと同じような感じね。」
その言葉に驚くヒナギク。図星を指されたからだ。
「・・・・・・」
「図星のようね。そういえば、こないだ健二君と一緒にいたわね。」
さらに驚くヒナギク。
「どうしてそんなことまで知っているのよ！！」
「この学校中には我が動画研究部のカメラが至る所に仕掛けてあるから。あなたの行動はほぼわかるわ。」

プライバシーもへったくれもない発言であるが、これではもう隠しようがないのは彼女にもわかった。

「まったく。そうよ、彼が気になっているわよ。ねえ、あなた彼について何か知らない？」

美希の情報収集能力はすごい。個人情報保護法の時代によく捕まらないものと言いたくなるほど細かい情報を仕入れてくる。

ところが、彼女から帰ってきたのは意外な答えであった。

「実はね・・・・・彼に関する情報はほとんどない。」

「え！？どういうことよ。」

「まあ時間がなかったのも原因かもしれないけど、とにかく名前と年齢しかわからないわ。経歴については一切不明。まるで過去がなかったかのようね。」

この瞬間、彼女に疑念が生まれた。

さて、そんな疑いを持たれた男は、三千院家で盛大なくしゃみをしていた。

「へっくしゅ！！」

「風邪ですか健二君？」

そばにいたハヤテが心配して声を掛けてきた。

「さあ、生まれてこのかた風邪はひいてないんですけど。誰か噂でもしてるのかな？」

「健二君は確かに風邪なんかひきそうにないですよね。もしかして誰か女子が噂しているのかも。健二君は結構人気がありますから。」

「そうでしょうかね。僕の人生は恋愛なんて無縁な人生でしたからわかりませんね。」

「だからって過去の記録を一々抹消することないでしょう。」

そう、実は彼は今まで自分の名が記録に残るようなら、その全てをありとあらゆる手段を使って抹消してきた。

「過去に縛られたくないだけですよ。思い出は心の中にだけ納めておきたいんです。もしかしたらどこかの政治家のお嬢様が情報を収集しているとも限らないですし。さ、仕事仕事。」

恐るべき洞察力！

そして彼は家事を続ける。まさか、生徒会長に思いを寄せられているとは夢にも思わなかったのだ。

疑念（後書き）

御意見・御感想おまちしています。
なお、作者試験突入のため、次回更新は5～7日後となります。

バレンタインの嵐　甲

一ヵ月後。2月。

三千院家では毎年恒例になったハヤテのナギにあげるチョコ作りが行われていた。

普通なら女の子が男の子にあげる物であろうが、三千院家では逆である。もっとも、世間一般でも女性から男性という考えは古くなりつつあるが。

さて、そんな中執事見習の健二とってみればバレンタインなど無縁の行事だった。

「健二君は誰かからチョコをもらったこととかないんですか？」

ふとハヤテが、隣で皿洗いをしていた健二にそんな質問をしてみた。

「そんな経験はありませんよ。両親は早いうちに他界していますし。孤児院は経営が苦しくてそんな物くれませんでしたし。中学高校はアルバイトに明け暮れていましたし。だいいち女友達さえいなかったんですから。」

ハヤテ自身、自分は不幸な身の上であると思っていたが、結構そう言う人は世間一般にいるようだ。

「でもチョコはもらえなくても、ハヤテさんみたいに借金取りに追われることもありませんでしたから、別に不幸とは思いませんよ。」

謙遜に近い言葉。健二は決して自分の人生が不幸と思おうとはしない。これは彼の性格なのであるが、ハヤテなど他人から見れば随分と彼が自身を低く見ているように見える。

「・・・・・・けど、今年はもらえるんじゃないですか。健二君以外と女子生徒の間で人気だから。」

「はあ。まあもらって嫌ということはありませんからね。けど最近なんか変なんですよ。なんか学院内で殺気を感じることがあるんですよ。」

「もしかして誰かが嫉妬しているとかじゃないんですか？」

「まさか、恋人もいないのに。」

だがそのまさかだったりするのだ。実はヒナギクが彼に想いを抱いているという噂が学院内にまことしやかに流れていたのだ。もっとも本人はまったく気付いていなかったが。とにかく、彼の敵は増えていたのだ。まあどうせもうすぐ卒業だが。

さて、その健二に想いを抱き始めたヒナギクはというと。

「あらヒナちゃん。今年もチョコ作っているのね。」

義母の声が彼女にかけられた。

「まあね。」

２年前まではチョコを貰うに終始していたヒナギクだが、去年からはハヤテに渡すために自分でも作っていた。

「けど、ハヤテ君はナギちゃんに決めたのよね。だったらヒナちゃん誰にあげる気なの？」

その言葉にドキッとするヒナギク。

「誰だっていいじゃない。お義母さんには関係ないでしょ。」

だが、そんな言葉は相手の興味を増すだけに終わることが多い。今回もそうであった。

「あら、そんな風に言うなんてますます怪しいわね。」

「う・・・・・」

「ねえ誰なのよ？」

しつこく聞いてくる義母。そこで、ヒナギクは黙り込む作戦に出た。

「・・・・・・・・」

「あら、黙り込んじゃった。本当にいったい誰かしら？あ！もしかして新しいナギちゃんの執事君かな。」

その言葉にさらにドキッとするヒナギク。

「え！！なんでそう思うの？というか何で彼のこと知っているの？」
「図星だったかしら？いやなんとなくよ。こないだハヤテ君といっしょにいる時にあったのよ。うーん、まああの子でもかまわないけどね。」
今すぐここから逃げたいと思うヒナギク。
と、そこでラッキーなことに、材料が足りないことがわかった。
「あ、お義母さんごめん。材料が足りないから私買ってくるね。」
そうして足早に出て行ってしまった。
「慌てて逃げるなんて、ヒナちゃんかわいい！」
そんなことを呟く義母。
これが後にまずいんだか良いんだかわからない騒動を起こすこととなるのだが。

バレンタインの嵐　甲（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

バレンタインの嵐　乙　誘拐事件発生！！

ヒナギクが義母の冷やかしから逃げるために家の外へ出ようとしたちょうどそのころ、近くの路上には一台の不審な車が止まっていた。

「兄貴、せっかく出所したのに本当にやるんですか？」

助手席に座った若いめがねを掛けた男が、運転席に座る少し年上の男に聞いた。実はこの二人、３年前のクリスマスにナギを誘拐しようとしてハヤテに阻止された二人組であった。その後脱獄して、ワタルのメイドであるサキを誘拐しようとして再び失敗、刑が重くなってようやく刑務所から出て来た所であった。それなのに再び同じ事をしようとしている。懲りない連中だ。

「しかたねえだろ、出所しても仕事にありつけねえ。このままじゃ飢え死にだ。だったらこうする以外に方法はねえ！また捕まっても刑務所なら寝床にも食事にもありつける。」

こういう所全く進歩していない。

「はああ。けど今度こそ大丈夫ですか？二度も失敗していると・・・・」

若い方はどうも不安がぬぐい切れないようだ。

「安心しろ、俺だって今度こそは同じ轍を踏んだりはしない。ちゃんと学んでいるさ。」

学ぶんだったら真っ当な人生を生きることを学べ！というかまず安易に犯罪に突っ走るその神経を正せ！！と作者も言いたくなる連中である。

といっても、本人たちにその自覚があるはずがない。

「今回のターゲットはある程度金は持っていそうだが、今までのような金持ちの部類に入る連中はさけた。簡単に言えば中産階級だ！！」

今まで金持ち層にターゲットを絞ったために失敗したと思っているらしい。もっともそれは間違いで、実際はこのハヤテのごとく！の世界で誘拐を犯そうとすること自体大きな間違いなのだ。

閑話休題。

そうこうしているうちに、ターゲットの少女が家から出てきた。

「あれが今回のターゲットだ。」

ピンクの長い髪の毛が美しい少女。

お分かりであろうが、その少女はヒナギクであった。

「大丈夫ですか？あの時のシスターみたいに外見と実力が大違いなんて事は・・・」

「安心しろ、今回はちゃんとしらべてある。あの少女は白皇学院の生徒らしい。あそこは名門校だからな。」

「なるほど、そんな名門校に常識はずれな人間がいるはずないと。兄貴、今回は上手く行く予感がしてきました。」

またひどい固定観念である。もしこの瞬間、その白皇学院こそ常識はずれの人間の巣窟であると知ったら、二人とも誘拐をためらっただろう。ましてや、今狙っている少女もその常識はずれの人間なのだ。

ちなみにシスターとはかつて三千院家に復讐しようとし、今は日本に住んでいるソニアのことだ。

「計画道理にやるぞ！！いいな！！」

「了解！！」

さて、自分が狙われているとも露知らず。ヒナギクはぼうっとしながら歩いていた。

「まったくお義母さんったら。」

義母の冷やかしの言葉が頭の中をぐるぐる回る。

「けど、本当にどうしようかな？」

実際チョコを作ってはいるものの、それをあげようか内心彼女は迷っていた。

健二にはここ最近の行動で大いに好意を持った。しかし、ここで

渡してもハヤテの時のように玉砕で終わらないか。それが大いに彼女の心配となっていた。

この時、もしヒナギクの精神が通常道理だったら、後ろから近づく不審な車の気配に気付いたかもしれない。だが、その時彼女は不運にも気付くことが出来なかった。

「やれ！！」

男の声が響いた。

「え！！」

気付いたがもう遅かった。その瞬間催涙スプレーを吹き付けられ、動きを封じられた。そして車の中へ押し込まれ、あっという間に縄で体を縛られ、口には猿轡をはめられてしまった。

そして車は猛然と走り始めた。

バレンタインの嵐　乙　誘拐事件発生！！（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

バレンタインの嵐　丙　追跡開始！

不意をつかれ、誘拐されてしまったヒナギク。もちろん、ただ捕まっているような彼女ではない、口を塞がれ、縄で縛られた状態になりながらも、なんとか抵抗を試みようとする。しかし、もちろん無駄な抵抗である。いくら彼女が力を掛けようがもがこうが、それで縄が解けるわけがない。

「んー！！！！」

叫んでももちろん言葉にならない。

その様子を若い方の誘拐犯が見て言った。

「兄貴、抵抗していますけどどうします？」

その言葉に対し、もう1人の誘拐犯は余裕の顔をして言った。

「何、無駄な抵抗さ。取り敢えずアジトに着いたらさっそく家の電話番号を聞き出して身代金の要求だ！」

「はい！！」

あまりにも上手くいっているので、二人の言葉には随分と余裕が含まれている。

一方のヒナギクは本当にピンチだった。

（油断したわ。まさか私が誘拐されるなんて。けどどうしよう。動

けないし、叫ぶ事も出来ないし。このままじゃ犯人の思いどおりに事が運んじゃう。だ、誰か助けて！！）

彼女の思いは届くのか？

さてそのころ、三千院家の執事（見習いの文字が取れた）大畑健二はお使いのため、新品のカシミヤのコートを着て、自転車に乗り走っていた。

その彼が、ちょうど桂家の近くを通っていた。

（そういえばこのあたりは桂さんの家の近くですね・・・・）

ヒナギクと会話してきた中で、何回か家の場所を聞いていた。そのことを走りながらふと思い出した。

（けど彼女のことをすぐ思い出すなんて。・・・・もしかしてこれが、ハヤテさんが言っていた、恋って物なのでしょうか？）

恋をした経験がないだけに、彼自身彼女に恋しているということにまったく気付いていない。

実際のところ、最近夜よく彼の見る夢の中に彼女が出てくるし、生徒会の手伝いの時に彼女と顔をあわせると何故か心臓がドキッとしているから、他人から見れば恋と見て間違いない。ただ本人がまったく気付いていないだけなのだ。どうやら三千院家の執事は恋愛事が苦手のようだ。

さて、そんなことを考えていた時、彼の目に路上で膝をついている女性の姿が目に飛び込んできた。

（何でしょう？）

自転車を止め、その女性に声を掛ける。

「あの、どうかしましたか？」

その女性が彼の声を聞いて振り返る。その顔は見覚えのある顔だった。

「あなたは確か桂さんのお義母さん。どうしたんです？具合でも悪いんですか？」

女性はヒナギクの義母だった。その彼女が路上で膝をついているなんて何かあったとしか思えない。そしてその彼女の口から出た言葉は彼を驚愕させた。

「あ、健二君。大変なの、ヒナちゃんが誘拐されたの！！」

「え！！」

実は彼女、慌てて出て行ったヒナギクの後ろからこっそり追っていこうとしたのだ。だが尾行していた彼女の目に飛び込んできたのは、ヒナギクが二人組みの男に車に連れ込まれ、誘拐される所だった。そしてそのままショックのあまり、彼女は膝をついていたのだ。

「どうしよう、ねえどうしよう！！」

パニックを起こすヒナギク義母。それを健二がなんとか宥めようとする。

「お、落ち着いてください！とにかく警察に連絡をしないと。それと、何か覚えていませんか？犯人の人数とか、特徴とか。何でもいいです。」

すると、彼女は記憶を探りながら話し始めた。

「ええと。犯人は車にヒナちゃんを押し込んだの。２人の男で、車は色が確か白で、普通の乗用車だったわ。ナンバーは、つの２２４６だったと思う。」

断片的とはいえ、情報があるのはありがたい。彼はすぐに自転車にまたがる。

「わかりました。取り敢えずお義母さんは警察に連絡をお願いします。僕は犯人を追いますので。でわ。」

「え！健二君！？」

彼女がそう言った時には、彼は自転車で素っ飛んでいった後だった。

バレンタインの嵐　丙　追跡開始！（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

バレンタインの嵐　丁　完結

追跡を開始した健二が誘拐犯の物と思われる車を見付けたのは、驚くべきことにわずか5分後であった。実は健二もハヤテと同じくすさまじいスピードで自転車を走らせられる。

「見付けました！！」

確認するため早速その車に近づいてみる。

一方、誘拐犯の二人組みも健二が近づいてくるのをバックミラーによって気付いた。

「兄貴！！自転車に乗った少年がものすごいスピードで近づいてきます！！」

「何！！追手か！！」

二人の脳裏に二年前の悪夢がよみがえる。つまりナギを誘拐しようとしたところ、ハヤテに阻止され、その挙句逮捕された時のことだ。（詳しくはハヤテのごとく！原作コミック一巻を参照のこと）

「どうします！？」

うろたえる二人組みの若い方。

「逃げる！！とにかく逃げる！！」

経験から兄貴と呼ばれる方の誘拐犯はとにかく逃げることにした。

というわけで、彼はアクセルを一杯に踏んでスピードを上げる。
それを見て、健二も犯人の車と確信した。
「間違いありませんね！逃がしませんよ！！」
犯人の車とわかったいじょう、絶対に逃がすわけにはいかない。
健二もスピードを上げる。
ここに自動車ＶＳ自転車のカーチェイスが始まった。
普通なら車のほうが有利だが、健二の体力に加え、ここで天は健二に味方した。住宅街の道であったため、誘拐犯の車は思うようにスピードを上げられない。そのため、スピードも出せれて小回りが効く健二がじわじわと距離を縮めていく。
一方、このカーチェイスによる車の揺れや犯人の言葉を聞いて、捕らわれているヒナギクは犯人が追い詰められているのがわかった。
（助けが来たのかしら？けど誰が？）
まさか健二が、しかも自転車で追いかけてきているとは夢にも思えなかった。
「兄貴このままじゃ追いつかれる！！」
と、ここで兄貴は気付いた。
「幹線に出よう。車が多ければきっとあいつも追跡を諦めるさ。」

作戦を変更し、幹線道路に向けて行き先を変える。それに健二も気付いた。

「急に行き先を変更しましたね！？そうか、幹線に出る気ですね。そうなると追いかけにくくなりますね。ようし、こうなったら一か八かに出るとしますか。」

健二は咄嗟に判断した。

「まだやったことはありませんけど・・・・・・・・必殺技を使いましょう！！」

実は彼、三千院家の書庫にあった本で、自分の必殺技を何個か考え出していた。ただしまだ実戦で使ったことは無かったが。まあ世の中そうそう必殺技を使う場面があるわけではないが。というかあったら色々物騒である。ちなみに、何個か考えているというのは、状況によって使う技を使い分けるためだ。

閑話休題。

彼は必殺技を使うため、スピードを上げて一気に犯人の車との距離を詰めた。

「行きますよ！！エナジーブラスター！！」

必殺技発動！

その瞬間、彼自身と乗っていた自転車が青い光の奔流になった。

「「何だ！！」」

驚愕する誘拐犯二人組みを尻目に、その光が車のボンネット部分を抉り、消滅させた。

「「そんなバカな！！」」

もちろん、ボンネットの下のエンジンもやられてしまったから、車は動けなくなった。

一方、技を使った健二の方は全くの無傷であった。それどころか不適な笑みを浮かべている。そして、犯人たちに近づいた。

「成功です！さすが三千院奥義書（2巻）に書かれている必殺技は一味違いますね。・・・・

さあ、もう逃げられませんよ。おとなしく投降しなさい！」

ケロリとした表情で言うが、それが逆に誘拐犯たちの動揺を誘った。

二人は車から降りると、ヒナギクにナイフを突きつけた。

「それ以上近づくな。近づいたらこのお嬢ちゃんの顔に一生消えない傷がつくぜ！」

「う！！」

さすがにこうされると手を出しかねる。

しばし膠着状態のまま時が過ぎた。

その状況を打破したのは。

（えい！！）

ヒナギクが犯人の足を凄まじい力で踏んづけた。

「痛ええ！！」

犯人に一瞬隙が出来た。それを健二は見逃さなかった。

それこそあっという間に犯人を投げ飛ばした。しかも二人とも。

わずか数秒間の出来事であった。

犯人を倒した健二は、すぐにヒナギクの縄を解いた。

「はい、解けましたよ。」

「あ、ありがとう。健二君。あなたどうして！？」

「どうしてって。人を助けるのに理由がいりますか？」

そう言いながら、ニッコリ微笑んだ。

「あ・・・・・」

その表情に見とれてしまうヒナギク。

そんな彼女を差し置いて、彼は犯人たちを縄で縛り上げ、すぐに警察に連絡した

そして、その場を離れようとする。

「では、後はお任せします。僕はお使いの途中だったもので。」

「え！？ちょっと待って！」

「すいません。あ、最後に。さっきのヒナギクさんの表情、とても可愛かったですよ。」

「え！！」

ヒナギクは彼の顔がほんのり赤くなっているのに気付いた。

「それでは。」

そして彼は再び自転車に乗って行ってしまった。

2月14日

「あれ、健二君チョコ貰ったんですか？」

チョコレートを大事そうに抱えている健二にハヤテが声を掛けた。

「ええ。」

「誰からです？」

「秘密です。どうせすぐにわかりますよ。」

「？」

彼はそれしか言わなかった。

一ヵ月後、白皇学院の卒業式の日。最強生徒会長と三千院家の二人目の執事がカップルになったという話題で学院内が持ちきりになった時、ハヤテは彼の言った言葉の意味を悟ることとなる。

バレンタインの嵐　丁　完結（後書き）

御意見・御感想おまちしています。

結婚式は・・・・・

ハヤテたちは3月、無事に思い出深い白皇学院を卒業した。そして月日はあっという間に過ぎて5月31日。

「マリア。どうかな？」

三千院家の一室で、ナギがマリアに言った。彼女が今着ているのは、純白のドレスであった。すなわちウェディングドレスであった。

そう、彼女は間もなく結婚するのだ。ようやく想いが通じた運命の人、ハヤテと。

今日は翌日に控えた結婚式に備えて、ドレスの試着であった。

「とっても似合っていますよナギ。」

微笑むマリア。彼女にとって、色々将来を心配していた、妹とも思える娘が晴の日を迎えようとしているのだ。嬉しくないはずがない。

「ありがとうマリア。マリアもとっても似合ってる。」

「ええ、とてもお似合いです。」

「ありがとうございます。2人とも。」

実はマリアも今、ウェディングドレスを着ている。彼女も明日ハヤテの兄である姫神勝と結婚するのだ。

ちなみに、結婚式は三千院家の敷地内で行われる。これは万が一に備えての事だ。何せナギに加えてハヤテも今や大金持ちなのだ。（加えて彼は帝から結婚祝いに三千院石油の経営権を譲られる事となっている。）

ところで、先ほどの会話に違和感を持たれた人もいるだろう。実は今部屋の中にはナギ、マリアともう1人の人間がいた。

マリアと同じメイド服を着込んだその女性。いや、少女と言って差し支えない人物。そう、新しい三千院家のメイドである。

鳳翔子、15歳。三千院グループ傘下のメイド喫茶から、ハウスメイドとして選抜された少女である。ちなみに彼女が送り込まれる

こととなった要因は、帝にある。彼がマリアが結婚すると負担が増えるから大変だろうと言い出し、有無言わさず送り込んだのだ。
健二を雇って充分と思っていたナギにとっては、帝が送り込んだこと事態かなり最初は懐疑的な目で見ていたが、どうして。さすがに帝が選んだだけある。白皇学院には主席で試験に合格して入学し、そして生徒会長に就任している。さらに、学業とメイド業を両立させられていることからも、彼女のすごさというものが伝わってくる。
その彼女、今は2人の着替えを手伝っている所であった。
「いよいよ明日だな。ようやくハヤテと結婚できる。」
ナギが感慨深げに呟いた。
「本当ですね。ハヤテ君とあなたが結ばれて、私本当に嬉しいです。」
「私も、マリアと姫神が結ばれて・・・・嬉しく思っているぞ。」
2人とも幸せ一杯である。
「感傷に浸っている所申し訳ありませんが、あの早く脱いでもらえないでしょうか？」
その言葉が、2人を現実に引き戻した。
「「あ、ごめん（ごめんなさい）。」
「ふふふ。」
そんな2人の光景を見て、翔子は笑った。

同時刻
「計画は今言ったとうりや。わかったな？」

「わかった。」
「わかりました。」
「必ず成功しますよ。」
三千院家の結婚式で、何かが起ころうとしていた。

結婚式は・・・・・（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

結婚式は・・・・2

そして迎えた6月1日。
この日三千院家は朝から忙しかった。もちろんハヤテとナギ、そして勝とマリアの結婚式の準備である。
結婚式に出る人数は意外と少ない。なにせハヤテと勝、そしてマリアには親族はいないし（ちなみにハヤテたちには両親がいるが、先日過去の犯罪が露見して逮捕され、網走刑務所に収監されたと連絡が入った）ナギにしても、両親は既に亡くなっていていないのだ。親族にしても、深い関係であるのは直接の祖父の帝と親友の1人である咲夜ぐらいだ。
というわけで、出席するのはいつもどおりの白皇のメンバープラス執事の健二にメイドの翔子、そして今回引退を決めた執事長のクラウスぐらいだ。あともちろん帝も参加する。
そんな中、ハヤテとナギはナギの部屋で二人一緒に話をしていた。
「ついにこの日を迎えましたね、ナギさん。」
ハヤテがしみじみと言う。
「ああ。本当に色々あったな。」
あの事件（ハヤテが生死の境を彷徨った時のこと）以降、本当に色々あったがとにかく晴れてこの日を二人はついに迎えることが出来た。
「ハヤテ・・・・」
「何です？ナギさん？」
ナギはその質問には答えず目を閉じて、顔をハヤテの方に向けていた。その行動で、ハヤテはナギが何をして欲しいか悟った。
ハヤテは手でナギの顎を軽く持ち、自分の顔を彼女に近づける。
と、そこへ。
「ナギ、ハヤテ君。」
扉をノックする音とマリアの声がした。思わぬ事態に、二人は慌

てて距離をとる。それと同時にマリアが入ってきた。
「お二人ともいるなら返事ぐらいして下さい。ってあら？」
マリアは二人の表情を見て、瞬時に何があったか悟ったらしい。
「お二人とも本当にお似合いですわね。」
冷やかされて顔を赤くする二人。
「い、いいではないかマリア。で、なんだマリア？」
ナギのその言葉に、マリアは少し呆れ顔になった。
「なんだとは何ですか。もう時間ですよ。二人とも着替える準備をして下さい。」
二人が時計を見ると、確かにそろそろ着替えねばいけない時間だ。
「あ、本当だ。じゃあナギさん、また後で。」
ハヤテは急いで部屋から出て行った。
「さ、ナギも行きましょう。」
「ああ。」
遅れて二人も部屋から出た。
しかし、部屋から廊下に出て歩き出した直後、ナギは後頭部に激しい痛みを感じた。
「！！」
彼女はその場に倒れこむ。その瞬間、ナギの思考は一時的に停止した。

しばらくして、ナギに意識が戻ってきた。
「一体何がどうなっているのだ？」
あたりを見回してみる。そこで、ナギは自分のいる場所が直ぐにわかった。先程いた廊下ではない。それどころかさっきハヤテと話していた部屋でもない。もっと小さな部屋だ。そしてナギには見覚えがあった。この部屋の面積と、最低限の調度品しかないことからすぐにわかる。ハヤテの部屋だ。
「なんで？とにかく、急いで出ないと。」
とにかく立ち上がろうとするが、何故か立ち上がれない。というよりも、体の自由が利かない。
彼女が不思議に思って見てみると、なんと両手足を完全に縄で縛られ、さらに体を机の脚に縛りつけられていた。
「な、なんだこれは！！」
異常な状況に叫ぶナギ。
だが、さらに彼女は気付いた。自分の直ぐ側に、黒い箱のような物が置かれているのを。
「こ、これは？」
その箱にはなにやらタイマーの様な物がつけられていた。まるで、漫画で出てくる時限爆弾のように。
「ま、まさか爆弾・・・・・・・・・・・・ぬわあああ！！！」
彼女の叫びが響き渡った。

結婚式は・・・・2（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

結婚式は・・・3

突然気絶させられ、そして目覚めてみれば縄で縛られてしまい行動の自由を奪われ、くわえて側に爆弾らしき物が・・・・・。
という危機的状況にナギは陥っていた。
「ぬわあああ!!! ハヤテ助けて!!!」
しかし、彼女がいるハヤテの部屋はお屋敷でも屋根裏に近い、いわば孤島のような空間だった。そういうわけで、いくら騒いでも誰も気付かない・・・事は無いはずであった。なにしろ以前はここから玄関まで叫び声が聞こえて、ハヤテが駆けつけたのだから。では一体?

さて、そのころ助けを求められている側のハヤテはというと、ナギが失踪したという報せをマリアから受けていた。
「ええ!! ナギさんが消えた!?」
「はい。一緒に部屋を出て、歩いていたはずなんですけど、いつのまにか消えていて・・・」
突然の花嫁の失踪。しかも結婚式の直前に。
「どれくらい前ですか?」
「20分ほど前です。」
20分となると，ちょっと用があってというには長すぎる時間である。かといって、屋敷の外へ出たなら絶対に誰か見ているはずである。しかし、その時間にナギが屋敷から出る姿を見た者はいない。
「ナギが消えた!?」
「え! なんで!?」

「どうなっているんだ！！？？」
場は騒然となり、上へ下への大騒ぎとなった。
「とにかく探しましょう。屋敷の中にいるはずなんだから。」
皆が混乱する中で。という気の利いた意見を言ったのはヒナギクであった。
というわけで、いつものメンバーと健二、翔子、さらには手空きのＳＰまで加えた屋敷内の大捜索が始まった。
食堂、客間はもちろんのこと、各ゲーム部屋に寝室、さらには地下の書庫に至るまでそれこそ草の根をかきわけがごとくの大捜索である。
しかし、探し始めて３０分。ナギが見つかる気配は一向に無い。
「いったいどこいったんや？」
そうぼやくのは咲夜だ。
その時，瀬川泉がとんでもないことを呟いた。
「もしかしてナギちゃん・・・・結婚が嫌になっちゃって・・・・」
それはとても小さな声であったが、ハヤテには聞こえていた。もちろん、精神面で相当な打撃があったのは言うまでもない。
〈グサ！！〉
もし人の心が見えるものがいたら、その瞬間ハヤテの心に出刃包丁が深々と刺さったのが見えただろう。
「ちょっと泉！縁起でもないこと言わないでよ！！」
そう怒るのはヒナギクだ。
「けど、もう探せるところはさがしたぞ。」
こう水を差すのは花菱美希である。
「やっぱりナギちゃん・・・・」
全員の脳裏に最悪のシナリオが。
とそことで、ハヤテはまだ探していないところがあるのに気付いた。そして猛然と走り始めた。
「え！？ハヤテ君！？」

「ハヤ太君！？」
「どこへ行くんだ！？」
という声も聞かず、彼はある場所に向かって一心不乱になって走った。

さて、再びナギの方に目を向けてみよう。
この時点でナギの目は・・・・・・・死んでいた。
目の前の爆弾らしき物にはタイマーのような物が付いているのであるが、その残り時間はわずか5分であった。
「もうだめだ。私死ぬんだ。爆発に巻き込まれて体は×××になって、骨さえも・・・・・・
ぬわああ！！私は何悲観的になっているんだ！！」
人間悪いことを予想するものではない。
「だ、大丈夫だ！ハヤテなら絶対に来てくれる！！」
彼女が言ったその時。
「ナギさん！！」
「早！！」
ハヤテ参上。
「ナギさん。大丈夫ですか！？」
予想外の展開に驚きつつも、ナギは自分の置かれている状況を話し始めた。
「ハヤテ、細かいことは後にして、爆弾が！！早くしないと爆発する！！」
「え！！」
ハヤテも爆弾の存在に気付いた。
「とにかく、縄を。」

ハヤテはとりあえずナギの縄を解いた。そして同時に、ナギの首筋に何かコードらしい物が付けられているのにも気付いた。
「これは！？」
ハヤテは辿ってみると、そのコードは爆弾に繋がっていた。そして、その先にはスコープがついていて、一定のリズムで波形を作っていた。
「もしかして、この爆弾ナギさんの脈に連動しているのか！？」
「え！？」
二人は凍りついた。つまり、爆弾を引き離すことは出来ない。
爆発まで３分４０秒。

結婚式は・・・3（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

結婚式は・・・4

爆弾の表示は既に3分30秒を指している。
「どうするのだハヤテ!?」
ナギも狼狽している。
「取り外すことも出来ない。かといって人を呼んでいる余裕ももうない。かくなるうえは、ここで解体するしかありません。」
ハヤテは決断した。
「何!!けど、爆弾処理なんてできるのか?」
「出来る出来ないの問題ではありません。やらなければならないんです。あなたを助けるために。」
そう言い切ると、ハヤテは直ぐに部屋に置いてあった工具箱を持ってきて、必要な工具を取り出して解体に入る。
爆弾は金属製の箱で、2箱で1つのセットになっていた。タイマーが付いているのは片側の箱みなので、おそらくこちらが起爆装置であると睨んだハヤテは、そちらの箱の上蓋のネジをドライバーで器用に外していく。この間、二人は何も喋らず、部屋を沈黙が包み込んでいた。
「ナギさん。」
もう少しで開きそうになったところで、突然ハヤテが言った。
「なんだハヤテ?」
「ジャガーノートっていう映画知っていますか?」
「いいや。」
あいにくとナギはあまり実写を見る人間ではない。
「爆弾解体の映画で、最後に赤と青のコードが残るんですよ。」
それを聞いて、ナギには思い当たる事があった。
「それって確かコ○ンにもあったぞ。」
アニメバカのナギらしい発言である。
「身も蓋も無いことといわないで下さいよ。」

そうこうしている内に、箱が開いた。予想通り中にはぎっしり配線やら配電盤が詰まっていた。しかし、それらは爆発に必要な物のようで、起爆装置のタイマーを止めるのには関係なさそうだ。ハヤテは起爆装置のコードらしき物を見つけ出す。

「あった！！」

なんとか見つけ出した。二人が中を覗くと。

赤、ピンク、紫、青、緑、黄色、橙、といった7本のカラフルなコードがそこにあった。

「こっちは7本もあるぞ！！」

「グレードめちゃくちゃ高いですね・・・・・・・・・・・・けど今は切るしかないんです。それでは始めます！！」

「がんばれハヤテ！！」

そして、2分後。何とか感によって5本を切り終えた。

「爆発まで後４０秒・・・・・」

「残ったのは橙色と黄色か・・・・・というかなぜ赤と青でないのだ！？」

正解。そんなベタな設定はうけないだろうという作者の偏見による。

「後３０秒・・・・・・・クソ、どっちを切ればいいんだ！！」

ハヤテとしても究極の選択に迷う。しかし本当に時間は殆ど残されていなかった。

（どうすればいいんだ？けど切らないとナギさんが！！）

こういう場でも自分のことをかえりみないのが彼らしいといえば彼らしい。

ところが、ここでナギが意外な言葉を発した。

「ハヤテ・・・・・・・・・もし本当にだめなら、私にかまわずお前だけでも逃げていいんだぞ。」

「え！？」

これはナギなりの心遣いではあったのだが、もちろんハヤテにはナギが死ぬことを前提に話しているようにしか聞こえない。だから

彼はキッパリこう言った。
「ナギさん。僕はそんな卑怯な事はしません。大丈夫、言ったでしょう。あなたを守るって。どんな事があってもあなたと一緒です。だから、僕を信じて。それに、僕達は決めたんですよ。今日結婚するって。その前に死ぬわけにはいきません。」
ナギにとってその時のハヤテの顔は、今まで見てきた中で一番かっこよく見えた。
「・・・・・・わかったハヤテ。そうだ私達は必ず助かる。そして結婚するんだ！！さあ時間が無い。ハヤテ、お前が決めた方を切れ！！私はお前を信じている！！」
後１５秒。ハヤテは決めた。
「オレンジ（橙色）を切ります。」
ハヤテはオレンジのコードにハサミをあてる。
そして。
パチン！
コードはいとも簡単に切れた。二人は直ぐにタイマーに目をやる。タイマーは止まっていた。
「「や・・・」」
やったと2人がいいそうになった時、爆薬が入っていると思われる箱から突然白煙が上がった。
「「！！！！」」
二人ともこの瞬間、生きた心地がしなかっただろう。
そして。
パパン！！
爆竹の音が鳴り響き。あたりに紙吹雪が舞う。
「！！？？」

結婚式は・・・４（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

結婚式は・・・5

「これは・・・・・・」
「一体？」
唖然とした表情になる二人。
「いやあ、おもろかったわ。」
突然部屋の入り口から聞き覚えのある関西弁がしてきた。
「「！！」」
二人が振り返ると、お馴染みのメンバーが揃っていた。
「咲夜、伊澄、ワタル、一樹、それにマリア！！」
「ヒナギクさんに健二君。兄さん。それに翔子さんに瀬川さんたちまで！！」
二人を見つめる全員が笑っている。この瞬間、二人は罠に引っ掛けられたことを悟った。
「もしかしてこの爆弾は？」
「私たちを騙すための？・・・・・いたずら？」
「そうや、おもろかったやろ。」
咲夜が笑いながらいうが、本当に死ぬことさえ覚悟した二人にしてみればあまりに悪質な冗談である。
「そんなわけあるか！！寿命が縮まったわ！！」
「そうです。ひどいですよ！！」
案の定二人とも抗議する。
しかし、それにたいしても咲夜は涼しい顔をしてこう言う。
「大丈夫や、あんたら二人とも戦車に轢かれても死ななそうやからな。」
その言葉に、ナギの怒りが爆発した。
「人を化け物にするな！！」

「ちょ、ちょそんな怒らんでもええやん！！」
こうしてナギと咲夜の追いかけっこが始まった。
一方，ハヤテはワタルに近寄って聞いてみた。
「これを計画したのは咲夜さんだけではないですよね？」
「ああ。俺に伊澄。一樹もだぜ。」
「伊澄さんに一樹君もですか！！」
これにはさすがに驚きだった。しかし、まだ納得できない点があった。
「けどこれ（爆弾のこと）随分と精巧に出来てましたよ。皆さんだけでよく用意できましたね。」
「ああ、それは帝のじいさんが協力して用意してくれたんだ。」
「ええ！！」
再び驚くハヤテ。まさか帝まで協力していたとは予想できなかった。
「というよりも、知らなかったのはナギとハヤテだけだぜ。」
「じゃあマリアさんたちも。」
「ええ知らされていました。」
微笑むマリア。
「おもしろそうだから俺たちも協力したんだ。」
いたずらっぽく笑う勝。
つまり、屋敷にいた全員が仕掛け人のイタズラだったわけだ。
「なんでわざわざこんなことしたんです？」
「そりゃもちろん、あんたらのラブラブっぷりを調べるためや！！」
逃げながらしっかりと言う咲夜。
「ナギとハヤテ様がどれくらい信頼しあっているか調べてみようということになって。」
伊澄がいつものおっとりした口調で言う。
「ハヤ太君は私たちのことふってまでナギちゃんと結婚するんだから。」

「そうだ。泉はともかく、ヒナまでふったんだからな。」
「ちゃんと彼女を愛しているのか私たちも知りたくてな。」
「そうそう・・・・・って私はともかくってどういう意味よ！！」
と相変わらずの会話をする生徒会三人娘。
「もう。それ以上言うとハヤテ君が可愛そうよ。それに、結婚式が始められないでしょ。」
こう気遣うのはいつもどおりヒナギクだ。
「あ、そうでした。予定を大幅に過ぎているじゃないですか！ナギさん、おいかけっこはその辺にして、着替えてきてください！！」
この言葉に，ナギは咲夜を追いかけるのをやめ、ウエディングドレスに着替えに行く。
その他のメンバーも屋敷の外に出る。
屋敷の庭には特設の結婚式場が設えられている。
新郎のハヤテたちはタキシードに着替え新婦が着替え終わるのを待つ。
そして、二人が着替え終わってやってきた。
「わああ！！」
出席者からそんな声が上がる。それほどまでに二人とも綺麗だったのだ。
「は、ハヤテ・・・・・どうかな？」
「とってもお似合いです。」
「あ、ありがとう。」
そして二人は壇上にあがる。ちなみに先にハヤテたちの式が行われる。
壇上では神父が待っているはず。しかし、そこにいたのは。
「神父さん、何やってるんですか？」
「本職がここにいて何が悪い？」
そこにいたのは、おなじみの亡霊神父であるリィン・レジオスターだった。

「だってあなた見えないんじゃ！！」
そう、彼はハヤテたち一握りの人間を除いて見えないはず。
「安心しろ、伊澄さんに頼んで他の人間にも見えるようにしてある。
・・・・ま、いいじゃ
ないか。それより私からも一応言わせて貰うぞ。おめでとう。」
「あ、ありがとうございます。」
「さ、式を始めるぞ。」
その後、滞りなく式は進んでいった。そして。
「では、誓いのキスを。」
そう言われ、ハヤテはナギのベールを上げる。
「ナギさん。」
「ハヤテ。」
見詰め合う二人。二人は互いの距離を縮める。そして唇が重なる。
その瞬間。
「おめでとう！！」
「お幸せに！！」
出席者たちから一斉に祝福の言葉が掛けられた。

結婚式は・・・5（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

別れ

ハヤテとナギ、勝とマリアの結婚式も無事に終わった。そして今は出席者全員でドンちゃん騒ぎのパーティーの真っ最中である。そんな中、1人の人物が三千院家の廊下を歩いていた。

その人物はとある部屋の前にたどり着くと、静かにドアを開け中へと入る。

その部屋は、今はもう誰にも使われていない、主を失った場所である。

「紫子。」

その人物、三千院帝はポツリと呟くと、部屋の隅に置かれていた椅子に腰掛けた。

彼以外に誰もいない部屋。かつて、彼が溺愛した娘が使っていた思い出深い部屋。その部屋の時間は、主がこの世を去ってから歩を止めている。

そんな部屋で、帝は1人語り始めた。

「紫子。今日ナギが結婚したぞ。早いものだな。お前がいなくなったときにはまだほんの小さな子供だったのに。・・・・相手の男は色々と不幸な奴だ。しかし、思いやりがあって、ナギをしっかりと守れる奴だ。あいつにならナギもまかせておけるとワシは信じておるぞ。」

そう語る彼に言葉を返す者はいない、ただ静寂のみが部屋を覆っている。

「思えば、ワシはバカなことをしてきたものだ。お前が、娘が死んだことを認めれなかった。いや、認めたくなかった。１０年以上もの間。・・・・・・だが、今日ナギがウェディングドレスを着ている姿がお前と重なった時、初めてわかった。お前が死んでも、心の中にいるということが。・・・・不思議だ。お前の死を始めて認めたというのに、心が不思議と穏やかだ。」

すると、彼の視界に１人の女性が入ってきた。

「紫子！！」

紫子は彼に向かって何も言わない。ただ微笑むだけだ。

「お前戻ってきてくれたのか！？」

そう言っても、彼女は何も言わない。ただ笑みを返してくるだけだ。帝は立ち上がり、彼女に近づく。

「紫子・・・・ナギの今日の姿見たか？とても綺麗だったぞ。」

紫子はうなずく。

「これからもあいつのことしっかり見守ってやってくれな。」

それに対しても紫子はうなずいた。そして彼女の姿はスーッと消えていった。

「・・・・・・紫子・・・・・・ありがとう。」

彼は再び椅子に腰掛けた。そして、彼の意識はそこで永遠に途切れた。

数時間後、ハヤテとナギが部屋の前を通りかかった。

「あれ、扉が少し開いてる。」

「ここは母の部屋だ。誰だ？」

二人が中に入ると、真っ暗な部屋で、椅子に腰掛けている人影が目に入った。

「帝さん？」

「なんだじじいか。寝てるようだな。おい、じじい、こんなところで寝たら体に悪いぞ。」

ナギが呼びかけるが全く返答が無い。

「「？」」

二人が慌てて側による。

「おい、じじい。起きろ！！」

近づいてもう一度声をかけるが全く起きない。

ハヤテが念のため脈を測ってみる。結果は。

「だめです。事切れています。」

「そ、そんな！」

ナギが信じられないという表情になる。

「老衰でしょうか・・・・・全く苦しんだ様子がありません。穏やかな表情で亡くなっています。」

帝の表情は、ナギがこれまでに見たこと無いほど穏やかな物であった。

「じじい・・・・・・・・・・最後に母にでも会えたのかな？」

「そうかもしれませんね。」

二人はその後しばらく、無言のまま帝の亡骸を見ていた。

別れ（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

引き継がれる想い

3年後の9月

帝が死んだ後のハヤテやナギたちは大忙しだった。彼の財産やら、さらに三千院グループの事を処理せねばならなかったからだ。

それでも、それも1年ほどの間に殆ど済ませ、次第に落ち着いた日常を取り戻した。もちろん、引き継いだ会社とかの管理もあったりしたが、それらは人に委託し、ハヤテやナギ自身は殆ど関わらなかった。

というわけで、ハヤテとナギはこのころには悠々自適なせ生活に浸っていた。ナギは趣味に没頭し、ハヤテも以前と同じく執事業に精を出していた。

しかし、この日は違っていた。

この日、ハヤテとナギは病院にいた。その病院の個室のベッドにナギが横たわり、ハヤテは笑顔でその側に立っていたそしてお互いに、腕に生まれたばかりの赤ん坊を抱えて。

「ナギさん。ありがとうございます。」

「別に礼なんかいらんよ。むしろ礼をすべきは生まれてきたこの子達にじゃないか？」

「それもそうですね。」

二人の子供はなんと双子。しかも男の子と女の子という組み合わせだ。

「ところでハヤテ、ちゃんとわかっているだろうな？」

「ええ、もちろん。子供の名前でしょう。男の子はナギさん。女の子は僕という約束でしょ？」

「そのとおり。では私から言うぞ。」

彼女は紙を一枚取り出して広げた。

「この子の名前は、三千院勇人（さんぜんいんはやと）だ。」

それに対し、ハヤテは驚いた顔をする。

「は、勇人。僕と一字違いじゃないですか？」

「そうだよ。だってお前のように強く、優しく育って欲しいという

意味で名づけたのだから。さ、お前の方も教えてくれ。」

「わかりました。僕の考えた名前はこれです。」

ハヤテもナギと同じように紙を広げた。

「この子の名前は、三千院紫（さんぜんいんゆかり）です。」

それに対して、今度はナギが驚いた。

「紫って、母と一字違い。」

「ええ。僕達はなんどもお母様に助けていただきました。だから、この子にはそういう人を助ける優しさを、お母様のような思いやりを持って欲しいと思って付けました。ダメでしたか？」

「・・・・・いや、いい名前だと思うよ。」

そして、彼女は自分の子供たちに視線を移す。

「お前たちは今日から三千院勇人と三千院紫だ。」

今のナギこそ、慈愛に満ちた母親といえよう。

「ナギさん。僕はあのバカ親からほとんど愛という物をもらえませんでした。だから、この子たちには僕が受けられなかった分まで愛情を注いであげる気です。」

それに対し、ナギも。

「私もだ。母や父が私に注げれなかった分までこの子達を愛する。」

さらに１６年後

「というのが私たちが結婚してお前たちが生まれるまでの話だ。」

今年３４歳を迎えるナギが自分達の子供たちに向かって言う。

「母さんたち、色々あったんだね。」

「けど、だから今もラブラブなんだね。いいな、私もお母さんみたいな恋してみたいな。」

子供たちの冷やかしに、ナギは少し顔を赤くする。

「うるさい。さ、二人とも学校の時間だろ。新学期早々遅刻しちゃいけないだろ。」

と、そこへハヤテの声がしてきた。

「勇人、紫。真理奈さんが来てるよ。」

「「いってきます！！」」

二人は学校へと向かった。入れ替わるようにハヤテがやって来た。

「二人とも今日から高校生なんですね。」

「早いな。」

しみじみというナギ。

「ええ。あの子達もいろいろな人と出会うんでしょうね。」

「だな。」

二人の胸には、かつての日々が思い起こされていた。

「あの子達はこれから一体どうなっていくんでしょうね？」

「さあな。けど、私たちも色々あったけど今は幸せだ。あの子達だって、私たちの子供だ。ちゃんと自分たちで幸せを掴むさ。」

「ですね。」

想いは引き継がれていく。次の世代へと。新しい世代が、今またその想いを引き継ぎ、旅立っていく。

引き継がれる想い（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0825c/

想いの行方

2010年10月9日13時05分発行